

厚沢部町教育委員会発掘調査報告書 第6集

史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡

館 城 跡 IV

－平成19年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書－

平成20年3月

北海道厚沢部町教育委員会

序 文

北海道南西部に位置する厚沢部町は、人口5千人に満たない小さな町ではありますが、川と森に囲まれた自然豊かな町であります。まちの8割以上を森林が占め、ヒノキアスナロやゴヨウマツの北限であり、トドマツの南限でもあります。多様な樹種で構成される森林は、多様な野生生物を育み、厚沢部町独特の豊かな自然景観を創りあげました。

私たちの先人も、厚沢部の豊かな森とともに暮らし、その伝統や文化を築き上げてきました。このたび発掘調査を実施いたしました館城跡も、そのような町の貴重な文化財の一つであります。

館城跡は、明治元年に松前藩によって蝦夷地経営の新たな拠点として築かれましたが、築城開始からわずか2ヶ月半という短期間で、旧幕府軍の攻撃を受け落城し、その後、再建されることなく現在に至っております。今では、わずかに土塁や堀、礎石、井戸跡が、当時の面影をとどめるのみとなっています。

現在の館城跡は、「館城跡公園」として町民に親しまれており、毎年5月上旬には「館城跡まつり」が開催され、多くの町民が心待ちにする恒例の行事となっています。また、幕末から維新期にかけての北海道の大きな変革期を象徴する遺跡として、学術的にも高く評価されております。

昭和41年に北海道の指定史跡となり、さらに平成14年に国の史跡に指定されました。平成17年から史跡の概要を把握するために発掘調査を継続して実施しており、また、平成18年度には保存管理計画を策定し、史跡の保存管理に努めているところであります。厚沢部町では館城跡のより積極的な公開・活用を図っていくために、今後、本格的な保存整備事業を実施する予定です。

今年度の発掘調査では、館城跡南西部の堀や柵列の所在が明らかになり、今後の整備に向けて大きな成果を得ることができました。これらの成果が、館城跡の保存整備に活用されるのみならず、調査研究における基礎資料となることを期待いたします。

最後になりますが、本事業の実施に際しまして、文化庁、北海道教育委員会をはじめとする諸機関・各氏から、多くのご指導・ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

平成20年3月

厚沢部町教育委員会
教育長 朝 倉 勝 春

例言

1. 本書は、厚沢部町が国庫補助（埋蔵文化財緊急調査費）を受けて、平成19年度に実施した館城跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺跡の地番は北海道檜山郡厚沢部町字城丘158ほかである。
3. 本書の編集は石井淳平（厚沢部町教育委員会社会教育課主事・学芸員）が担当した。
4. 文責者は、特に記した者以外は石井淳平である。
5. 現場及び遺物の写真撮影は石井淳平が担当した。
6. 陶磁器の鑑定は、石井淳平が行った。
7. 陶磁器の実測・トレース及び遺構図面等のトレースは安達優子が行った。
8. 本報告書に掲載した20万分の1地勢図、5万分の1地形図、空中写真は、国土地理院長の承認を得て、複製したものである。（承認番号）平19道複第120号
9. 花粉分析及び樹種同定は株式会社パレオ・ラボ（藤根久）に委託した。
10. 出土資料は厚沢部町教育委員会が保管する。
11. 調査にあたっては、「館城跡調査検討委員会」を組織し、指導を受けながら調査を実施した。
委員長 藤沼 邦彦（弘前大学人文学部教授）
副委員長 後藤 元一（元札幌市立高等専門学校教授）
委 員 久保 泰（松前町郷土資料館館長）
佐藤 永吉（館観光促進会会长）
千田 嘉博（奈良大学文学部准教授）
指導・助言 山下信一郎（文化庁記念物課）
田才 雅彦（北海道教育庁文化・スポーツ課文化財保護グループ）
12. 調査にあたっては、下記の方々及び機関のご協力、ご助言をいただいた。
猪熊樹人（根室市歴史と自然の資料館）、佐藤智雄、保科智治（市立函館博物館）、武永真（白老町仙台藩元陣屋資料館）、坪井欣也、中井均、中野雄二（波佐見町教育委員会）、吉田修造、函館市中央図書館、北海道立図書館

記号等の説明

1. 実測図等の縮尺は原則として以下の通りとし、全てスケールを付して図中に標示する。
遺構図 40分の1、陶磁器・金属製品 3分の1
2. 実測図中の方位は真北を示す。
3. 土層等の色調、含有物の混在状況（面積比率）については、『新版 標準土色帖』（1996年版）に基づき表記した。
4. 散兵壕については、平成17（2005）年の調査で館城跡とは直接関係しない構造物であることが判明したため、カッコを付けて「散兵壕跡」と表記する。

目次

(本文・目次・表・図版)

序文

例言

記号等の説明

<本文目次>

I 章 調査の概要	1	(2) 現地測量	17
1. 調査要項	1	(3) 写真記録	18
2. 調査体制	1	(4) 1次整理	18
3. 調査に至る経緯	1	(5) 2次整理	18
4. 調査の目的	2	(6) 保管	18
5. 調査の経過	2	3. 基本層序	18
(1) 調査準備等	2	IV 章 遺構と出土遺物	21
(2) 現地調査	2	1. 調査区の概要と目的	21
(3) 整理作業	2	2. 検出遺構	21
6. 調査結果の概要	3	(1) 第1調査区東側 SD1	21
(1) 調査の目的	3	(2) 第1調査区 SD1 屈曲部及び SD2 北西端	21
(2) 調査区の設定	3	(3) 第2調査区 SD2	25
(3) 調査の結果	3	(4) 第1調査区 SD2	25
II 章 遺跡の位置と環境	5	(5) 第1調査区 SD1 北端	25
1. 地理的環境	5	(6) 第1調査区 SA1	29
(1) 位置と地形	5	(7) 第1調査区 SA2, SA3	29
(2) 地質	5	3. 遺構出土遺物及び包含層出土遺物	29
(3) 館城跡関連遺跡	5	(1) SD1 出土木製品	29
2. 歴史的環境	9	(2) 包含層出土陶磁器	29
(1) 松浦武四郎の見た館地域	9	(3) 包含層出土石器	34
(2) 青江秀の見た館地域	10	V 章 自然科学的分析	35
(3) 「国分館跡」と『北海道旧纂図絵』	12	1. 館城跡の花粉化石	35
(4) 『報功心血』にみる館城跡	13	2. 館城堀跡出土木材の樹種同定	39
(5) 「開墾役所跡」とその出土遺物	14	VI 章 調査のまとめ	41
3. 館城築城の経緯	15	1. 館城跡南西部の外郭線構造について	41
(1) 13代藩主崇広の死去と徳広の藩主就任	15	2. 花粉分析結果から推測する館城跡周辺環境	41
(2) 正議隊のクーデター	15	について	41
(3) 館城の築城	15	3. SD1 出土の木製品について	42
III 章 調査の方法	17	4. 今後の課題	42
1. 発掘調査基線	17	参考文献	43
2. 調査の方法	17	参考資料(報功心血)	50
(1) 掘削	17		

<挿図目次>

I 章			
図1 館城跡遺構・調査区配置図	4	図9 第1調査区東側SD1	23
II 章		図10 第1調査区 SD1 屈曲部及びSD2 北西端	24
図2 厚沢部町の位置と館城跡関連遺跡	6	図11 第2調査区 SD2	26
図3 館城跡の位置と館地区の地形	7	図12 第1調査区 SD2	27
図4 指定地周辺の地形と指定範囲	8	図13 第1調査区 SD1 北端	28
図5 推定「開墾役所跡」出土陶磁器	15	図14 第1調査区 SA1	30
III 章		図15 第1調査区 SA2、SA3	31
図6 グリッドの呼称方法	17	図16 SD1 出土木製品	32
図7 基本層序模式図	19	図17 包含層出土陶磁器	33
IV 章		図18 包含層出土石器	33
図8 調査区及び遺構配置図	22		

<表目次>

表1 SD1出土遺物(木製品)一覧	34	表3 包含層出土遺物(石器)一覧	34
表2 包含層出土遺物(陶磁器)一覧	34	表4 包含層出土遺物集計	34

<写真図版目次>

写真図版1	53	写真11 第1調査区 SD2 北西端断面(西から)	
写真1 館城跡周辺航空写真		写真12 第2調査区 SD2 検出状況(北西から)	
写真図版2	54	写真図版8	60
写真2 館城跡周辺航空実体写真		写真13 第2調査区 SD2 と水路の切合い関係(北西から)	
写真図版3	55	写真図版9	61
写真3 推定「開墾役所跡」出土コンプラ瓶		写真14 第2調査区 SD 2 断面(南東から)	
写真4 城ノ岱全景		写真図版10	62
写真図版4	56	写真15 第1調査区 SA1 検出状況(東から)	
写真5 調査区全景(南東から)		写真16 第1調査区 SA1 断面(北から)	
写真図版5	57	写真17 第1調査区 SA2 検出状況(北から)	
写真6 第1調査区東側 SD1(西から)		写真18 第1調査区 SA3 検出状況(北から)	
写真7 第1調査区東側 SD1 木材出土状況		写真図版11	63
(東から)		写真19 SD1 出土木製品	
写真8 第1調査区東側 SD1 断面(西から)		写真20 SD1 出土木製品断面	
写真図版6	58	写真図版12	64
写真9 第1調査区 SD1 屈曲部・SD2 北西端(北西から)		写真21 包含層出土陶磁器	
写真図版7	59	写真22 包含層出土石器	
写真10 第1調査区 SD1 屈曲部横断面(南から)			
ら)			

I 章 調査の概要

1. 調査要項

事業名：町内遺跡発掘調査事業

調査主体：厚沢部町教育委員会

調査地：北海道檜山郡厚沢部町字城丘376

調査面積：397m²

調査期間：現地調査：平成19年6月11日～平成19年8月10日

整理作業：平成19年9月3日～平成19年3月31日

2. 調査体制

厚沢部町教育委員会

教育長 朝倉勝春

社会教育課長 関川 潔

社会教育係長 高野政人

社会教育係 石井淳平（発掘担当者）

社会教育係 三戸康彰

社会教育係 船瀬祥太

発掘調査作業員

山岸百合子、長尾数利、安達優子、佐々木真弓、齊藤学、成田博仁、武田睦子、金子千春

整理作業員

安達優子

3. 調査にいたる経緯

館城跡は、昭和41年7月7日付北海道教育委員会広報第2945号の告示（北海道教育委員会告示第65号）により、道指定史跡となった。

昭和63年頃から、町では国の史跡指定へ向けての取り組みを進め、昭和63(1988)年9月29日～10月13日、平成元年10月2日～11月4日、平成2年10月2日～16日の3カ年にかけて、厚沢部町教育委員会による遺構確認調査を行っている。この3カ年の調査では、特に館城跡東部の溝や柵の所在が明らかとなった。これらの成果を受け、平成13年6月25日、「史跡松前氏城跡福山城跡の追加指定の申請をし、平成14年9月20日付官報号外第208号で、「史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡」として国指定の告示（文部科学省告示第183号）がなされた。

平成15年7月に学芸員を配置し、平成17年から2カ年で保存管理計画策定事業を行っている。平成17年6月22日に、文化庁記念物課主任文化財調査官坂井秀弥氏、北海道教育庁文化課主査長沼孝氏が来町し、館城跡を視察した。視察の中で、保存管理計画策定のためには、館城跡の外郭線を構成する堀・土塁の範囲や構造、「散兵壕跡」とされる遺構の内容を確認する必要があるとの指導を受けた。この指導を元に、平成17年度及び18年度に保存管理計画策定に必要な堀・土塁など館城跡の外郭線を構成する遺構及び、「散兵壕跡」の内容確認調査を実施した（厚沢部町教育委員会2007）。平成18年度の調査により、館城跡西辺の堀・柵列の所在が広範囲に渡って明らかとなつたが、西辺の堀の北側延長は史跡指定地外の

町道下へと延びているため、追跡調査が不可能な状況となった。また、地籍図及び航空写真的分析により、現在確認している西辺の堀よりさらに西側により大きな区画が存在する可能性が浮上したことから、これまで部分的にしか発掘調査が実施されていなかった館城跡南西部において、堀・柵列の所在確認調査を実施したものである。

4. 調査の目的

館城跡南西部は、平成2年に発掘調査が行われ、堀や柵列の所在が確認されていた。平成18年度に実施した発掘調査では、この時の調査成果に基づいて発掘調査区を設定し、館城跡西辺の堀・柵列を検出している。以上のことから平成2年の発掘調査は、高い精度を有しており信頼できる調査成果であるが、幅約1mの狭いトレンチによる調査であることから、広範囲の発掘により、南西部の堀・柵列の状態を面的に把握する必要があった。また、南西部の堀・土塁はC-11グリッド付近で2方向に分岐しており、平成2年の調査ではこのうち北西に延びる堀のみを調査対象としていたことから、今回の発掘調査では、西へ延びる堀の延長を確認することを目的として調査区を設定した。

5. 調査の経過

(1) 調査準備等

- 4月17日 現状変更許可申請書提出
- 5月9日 発掘作業員を募集
- 6月4日 発掘作業員雇用契約の締結、借上げ車両・借上げ仮設ハウス納品、測量作業開始
- 6月7日 現状変更許可、発掘調査用器材搬入

(2) 現地調査

- 6月11日 12.5ラインに沿って、D-12-c~C-12-d間に幅2mの調査区（第1調査区）設定
- 6月13日 SD1及びSD2検出
- 6月14日 SA1検出
- 6月19日 C12-a～bに第2調査区設定
- 6月20日 第3調査区設定
- 6月22日 13ラインに沿って、D-13-a~D-13-b間に幅2mの調査区設定
- 6月27日 13ラインの調査区西側拡張作業開始
- 7月3日 12.5ライン調査区西側拡張作業開始
- 7月8日 第1回館城跡調査検討委員会現地視察
- 7月9日 第1回館城跡調査検討委員会開催
- 7月13日 第1調査区北端SD1調査開始
- 7月20日 第1調査区遺構検出状況写真撮影
- 7月27日 発掘調査区全体写真撮影
- 7月30日 調査区埋戻し作業開始
- 8月8日 調査区埋戻し作業終了
- 8月10日 調査器材洗浄、搬出 現地調査終了

(3) 整理作業

- 9月4日 整理作業開始 素図等作成作業開始
- 10月2日 遺物実測図作成作業開始

11月1日～2日 第2回館跡調査検討委員会開催

12月27日 報告書原稿入稿

6. 調査結果の概要（図1）

（1）調査の目的

今回発掘調査区を設置した地域は、館跡南西隅にあたり、平成2年の発掘調査により堀や柵列の所在が部分的に明らかにされている。ただし、平成2年の調査では、北西と西に分岐する堀・土塁のうち、北西に延びる堀（SD1）の延長のみが調査対象とされ、西へ延びる堀（SD2）の延長は明らかにされていない。今回の調査は、分岐した2本の堀・土塁の関係について、特に西へ延びる堀の延長を確認することを目的に実施した。

（2）調査区の設定

12.5ラインに沿って幅2mの調査区を設定した。この調査区（第1調査区）により、分岐した2本の堀・柵列の延長（SD1及びSD2、SA1）を確認し、ここから順次調査区を拡張することとした。さらに12.5ラインより西側の様相を確認するため、13ラインに沿って幅2mの調査区を設定した。ここから東西に調査区を拡張し、分岐した2本の堀・柵列の延長を確認した。西側では、平成2年に検出した溝（SA3）の全容を把握するため、13.5ラインから西へ3mのところまで調査区を拡張した。

第1調査区から幅2mセクションベルトを挟んで東側に第2調査区を設定した。第2調査区は、現存する堀・土塁と第1調査区で検出した堀の接続を確認するために設定した。

分岐した堀・土塁に挟まれた平坦面は、12ラインの約2m東で10～20cmの段差をもつ。この段差が人為的に形成されたものか、自然地形なのかについて確認するため第3調査区を設定した。

（3）調査の結果

C-11グリッドで分岐する2本の堀・柵列は、西に延びるにしたがい徐々に幅を狭め、D-13-aで交差する。SD1は城内側約4mのところに並行する柵列（SA1）を伴うが、SD2には柵列が伴わない。SD1、SA1はほぼ真西に延び、それぞれD-13-a及びD-12-dグリッドで直角に北へ方位を変える。SD2は現存する堀の延長線上をまっすぐに延び（N-55°W）、D-13-aで途切れる。SD1の屈曲部において、SD1とSD2が最も接近するが、この部分には平成2年の発掘調査区（0-8）があり、Ⅲ層（地山）まで掘削されており、十分な確認作業ができなかった。断言はできないが、SD1とSD2は接していなかった可能性が高い。SD1、SD2の土層は、下層が自然堆積、上層が人為的な埋戻しによる堆積である。館跡廃絶後、一定期間放置され、その後、埋戻されたものである。

SA1は、布掘による柵列で、平面と断面で柱痕を確認した。柱に使用された木材は残存しない。

SA2及びSA3はほぼ平行し、末端部も平行の位置関係で止まるところから、同一時期の所産と考えられる。機能・用途は不明。SA2がSD2を切って掘り込まれていることから、館跡に伴う造構でないことが明らかとなった。

分岐した堀・土塁に挟まれた平坦面とその西側との境界にある段差については、第3調査区を設定して確認を行ったが人為的に掘削された痕跡は確認できなかった。

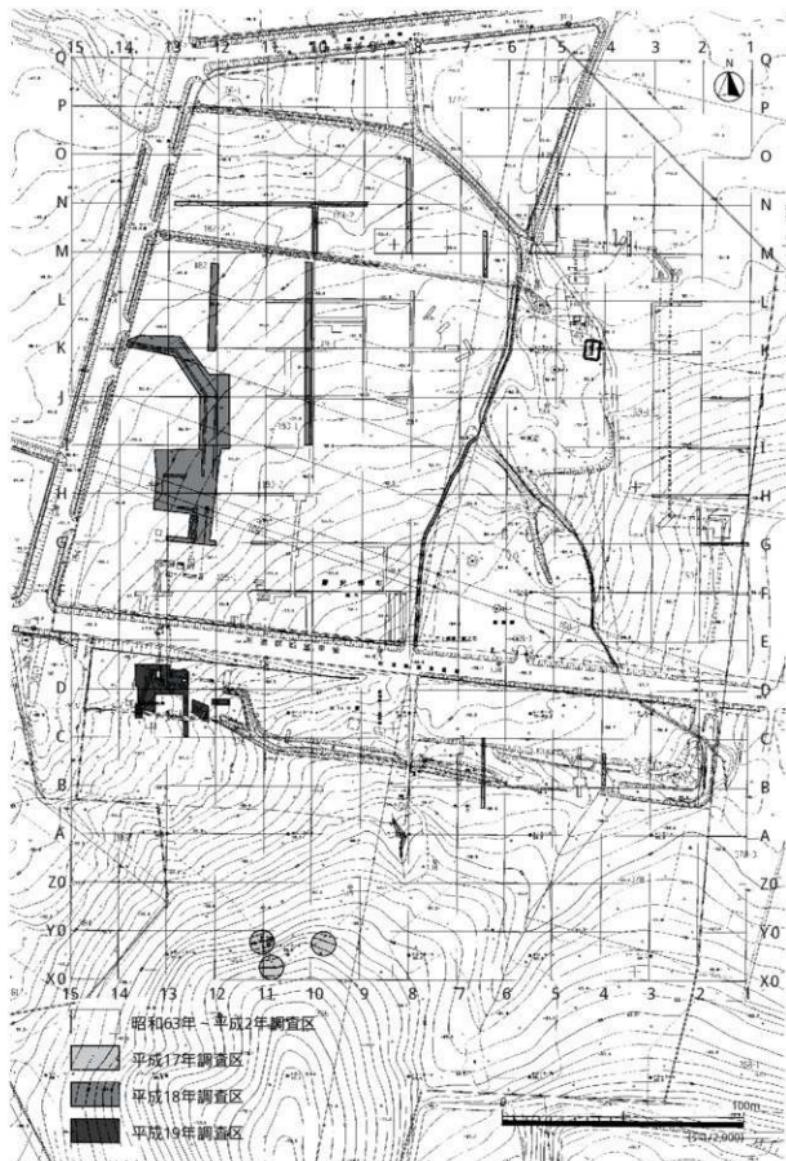


図1 館城跡遺構・調査区配置図

II章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

(1) 位置と地形（図2～4、写真1、2、4）

厚沢部町は、北海道南西部渡島半島に所在し、北緯 $41^{\circ}47' \sim 42^{\circ}03'$ 、東経 $140^{\circ}09' \sim 140^{\circ}28'$ に位置する。江差町、上ノ国町、木古内町、北斗市、森町、八雲町、乙部町と界を接し、町域は厚沢部川とその支流である安野呂川、鶴川の三河川の流域にまたがり、総面積は460.42km²、東西約29km、南北約27kmの広がりをもつ。

館城跡の所在する館地区（厚沢部町字新栄、字当路、字中館、館町、南館町、字城丘、字富里の総称で旧大字館村にほぼ一致する地域）は、東側を日本海と太平洋との分水嶺を形成する山塊、南側及び西側を梯子山、幌内岳、五郎助岳などの標高500m級の山々、北側を字中館のなだらかな丘陵地帯に囲まれた盆地である（図3）。盆地の規模は、古佐内川と厚沢部川の合流点付近の地峡から佐助沢、泉沢の合流地点までの東西約9km、南館の市街地から館町市街地までは南北約1.5kmである。

館城跡は、厚沢部川左岸の盆地の南西、厚沢部川とその支流である糠野川の合流地点から東へ約1kmに位置する。南方から延びる舌状台地上に立地し、遺跡周辺は南から北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡の標高は約50mで、糠野川に面した平坦面からの比高差は約20mである。遺跡の北、西、東は開け、南は比高差約30mの小丘陵（通称「丸山」）となっている。

(2) 地質

館地区的地質は、新第三紀に形成された厚沢部層、館層、鶴層などのシルト岩や砂岩によって形成され、さらに、これらの基盤として、古生代の松前層群と中生代の上磯層群がある。新第三紀中新世前期には、グリーン・タフ変動に伴う火山活動により福山層の堆積があり、中新世中期の大規模な海進により、檜山層群が堆積する。厚沢部層の時期に現在の向斜軸（館城跡、鶴町市街地の東側をとおり、南北方向に延びるライン）より東側の沈降に伴って、多量の堆積物が形成された。

館盆地の中央部分では軟質の館層が広く分布することから、河川の浸食の影響を強く受け、広く開析された低平地が形成されている。字新栄から館町市街地にかけては、1段の河成段丘が形成され、現河床から約45～55mの比高差をもつ。段丘堆積物は、松前層群からの供給によるチャート・砂岩・粘板岩などの礫で構成される。館町、字当路、字新栄では沖積平地が発達し、厚沢部川の氾濫原を構成する（参考文献：北海道開発庁1970、工業技術院地質調査所1975）。

(3) 館城跡関連遺跡（図2）

館城跡及び箱館戦争関連遺跡として、①官軍の沢、②稲倉石古戦場、③鶴村古戦場、④丸山古戦場、⑤ロクロ場、⑥開墾役所跡、⑦米揚岱などがある。①は、明治2（1869）年に新政府側の部隊の進撃路となつた沢、②～③は館城攻防戦にともなう古戦場、⑤～⑦は安政年間に設置されたとされる開墾役所跡とそこへ荷揚げしたと伝えられる地域である。⑦は、館城跡に物資を荷揚げしたと伝えられる地域である。

②稲倉石古戦場は、明治元（1868）年11月10日、館城攻略のため箱館五稟郭を出陣した旧幕府軍一聯隊と松前藩兵との戦闘が行われた古戦場である。古戦場は、現在の鶴ダム築堤付近と推測され、ダム建設地に選定されたことから明らかなように、急峻な岩山からなる地峡である。この地点を旧幕府軍に突破された場合、その背後は鶴川が開析した平野が広がり、館城までの進撃を許すこととなる。松前藩としては館城防衛上、稲倉石の守備は必須であった。そのため、松前藩は谷底の道路を封鎖し、小口径砲數門を装備した陣地を構築していた。旧幕府軍による陣地の攻略は困難とみられたが、左右の岩山から狙

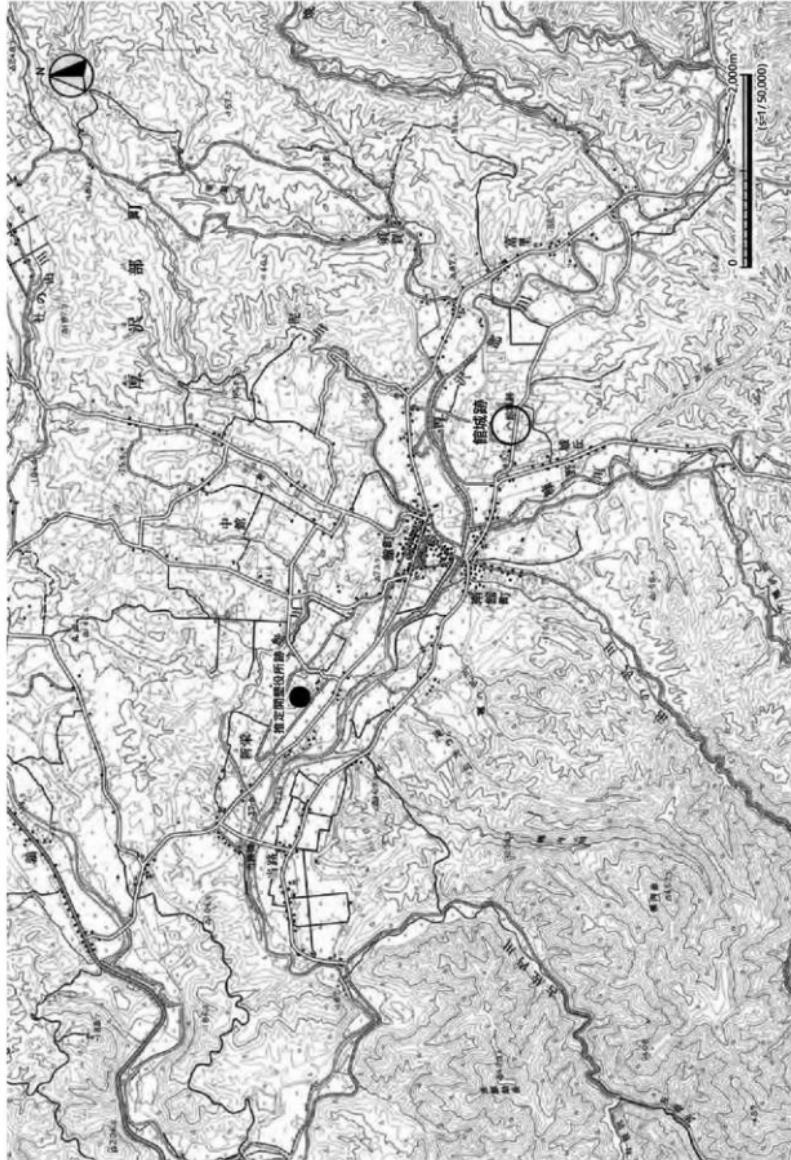


図3 館城跡の位置と館地区の地形（国土地理院発行5万分の1地形図「館」に加筆）

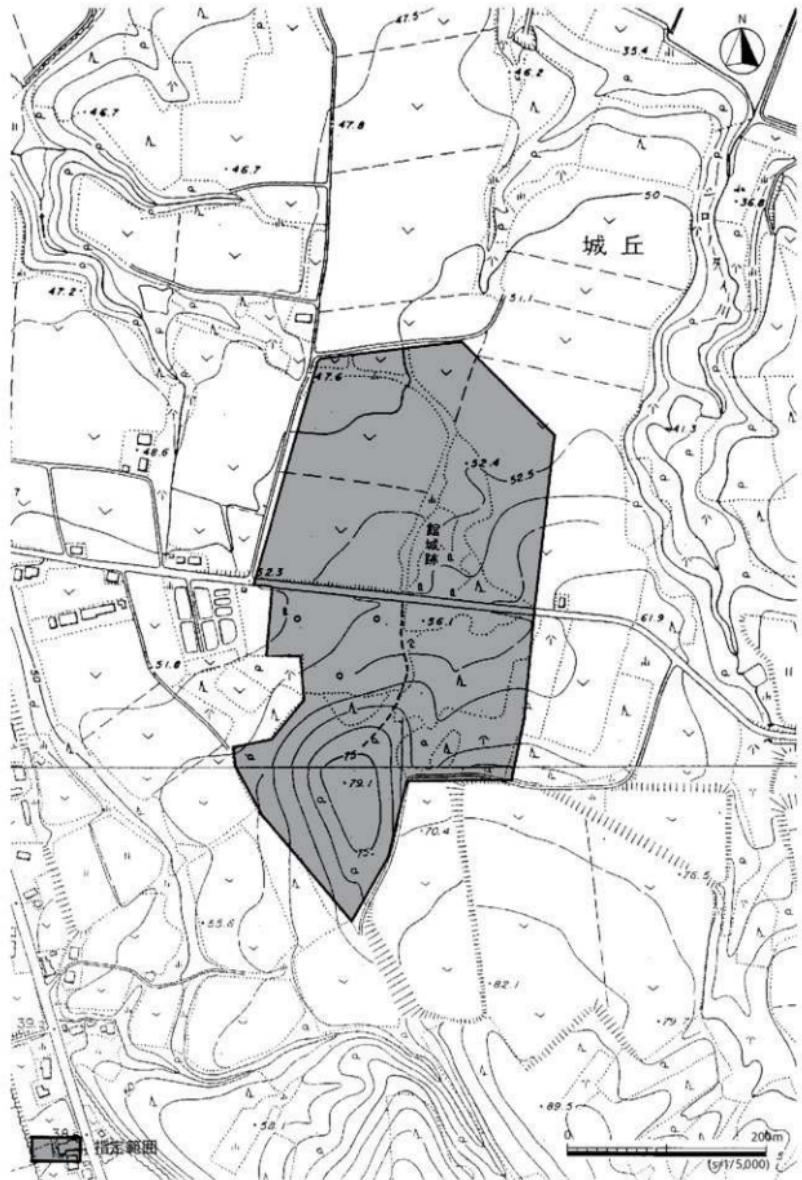


図4 指定地周辺の地形と指定範囲

撃されたため、支えきれずに陣地を捨てて敗走した。

③鶴村古戦場は、鶴村に宿陣した旧幕府軍の本陣を松前藩軍が強襲したことから起きた戦闘である。稻倉石で松前藩軍を敗走させた旧幕府軍は、11月13日鶴村（現字第）へ進軍し、ここに宿陣する。翌14日、2小隊を偵察のため館村へ派遣したところ、俄虫村（現本町・新町ほか）方面から進んできた松前藩兵が鶴村本陣を襲撃した。旧幕府軍は暫時の戦闘の後これを撃退している。

④丸山古戦場は、旧幕府軍の偵察隊と館城から進出した松前藩側の偵察隊との小競り合いである。11月14日、旧幕府軍が2小隊を偵察のため館村へ派遣したところ、鶴村から館盆地へと越える小丘陵において、松前藩兵と遭遇し、戦闘となった。この戦闘では、旧幕府軍のラッパの音に驚き、松前藩兵が敗走したことが「麦叢録」（菊地1998）などに記されているほか、松前藩側の証言からも確認されている（『櫻島－厚沢部町の歩み』p448）。

⑤開墾役所跡は、館城築城以前に松前藩が設置したとされる役所の跡である。次節5項で詳述する。

2. 歴史的環境（図5）

（1）松浦武四郎の見た館地域

館村が文献に記録されるのは、松浦武四郎の『三航蝦夷日誌』（吉田1970）が最初である。この日誌は全35巻からなり、『初航蝦夷日誌』、『再航蝦夷日誌』、『三航蝦夷日誌』の3部構成となる。武四郎は、弘化元（1844）年に京都を発し、津軽半島の舞戸から蝦夷地へ渡ろうとするが渡航できずといった江戸に戻り、弘化二年松前商人齊藤左八郎の船に便乗し蝦夷地へ渡航する。翌弘化三年、松前から日本海沿岸を櫂太まで北上し、その旅程の中で館地域を訪れている。館地域及び厚沢部川流域に関する記述は「再航蝦夷日誌卷之三」に収められている。近世後期の館地区を知る上で重要なことから、長文であるが以下に引用する。

館村むかし此村ニ首長老人居住せし由申伝ふ。此村当沢の第一番奥なる村也。惣而稼方前ニモ云如く征割、角引、炭焼等致し其余は畑少し斗作り。春は漁獵に出る也。此村迄を惣而土橋より七りといへり。然れども少し近きやニ覺ゆ

（中略）

扱此村ニ山二入迄凡むかしは千軒の余も有し由也。皆其比には檜山盛んにし而金山も有りし由也。今に村中古敷間歩、割場等数多し。其次夜も其辺り廻々見物セシニ、如何ニモ金質多き土地に而是を此まま捨置ことまたおしきものぞ

扱此辺りの村の畠を掘る時は種々異形の器物出るよし也。二ツ三ツをもらひて帰り今に所持す

また此村々より東部の落部村へ越る道有とかや。夷人は平日ニも越來るよし也。然し人跡絶たる處故二人間は越ることを得セざるよし也。然れども山稼方どもは雪降れば是を一日に緩りと越よし聞きたり。又此沢目二りも入て摺鉢像の沢有るよし。是えは江差の年寄齊藤佐八郎なるもの見分二行し話しが聞ニ、此処甚宜敷材木多きよし。其大なるは五圍、七围ニも及ぶ檜なりと。何分ニも其出奔不レ宣が故ニ今ニ空敷棄有るよし也。是等ニ而考林子平の七里の檜山と有しは、未此地をしらずして只江差のミト思ひしなるべきか。実ニ皇國版籍の中如レ此巨材を産する地なるべき干志土未だ是に目を留めざるぞ歎するニ余り有なるべし。実ニ此のごときよく土質の沢を空しく棄置こと歎するニあまり有べし。

武四郎は、まず館村の沿革に触れ、かつて「酋長」が居住していたとする。その時代には、檜山の伐採が盛んで、さらに金山もあったという。武四郎は、古い坑道（「古敷間歩」）や割場の跡を目撃したこと記している。

武四郎訪問当時の館村の主な生業は、柵割、角引、炭焼きなどで、畑を少しばかりつくり、春は漁獵に出る。このような生業形態は、厚沢部川流域の他の村々と同じである。武四郎は、館を「金質多き土地」と判断し、このまま捨て置くことはもったいないと感想を述べている。

また、縄文土器と思われる「異形の土器」が付近の畑から出土することを述べ、数点を持ち帰り、執筆当時それらを所持していたことを記している。

武四郎自身は足を踏み入れていないものの、厚沢部川の上流から落部村（現八雲町落部）へ抜ける道があったことを記している。この山越えはアイヌ民族なら1日で越えるが、和人には1日では越えられず、ただし、冬になれば、袖夫達は余裕をもって1日で越えることを伝え聞いている。

江差の年寄り齊藤佐八郎の話として、館村の奥には非常に良質なヒバ（ヒノキアスナロ）の樹林があるが、不便な場所であることから材木として搬出できず手が付けられないことを聞き、このような土地が未開拓のまま放置されていることを嘆いている。

（2）青江秀の見た館地域

青江秀は北海道庁理事官として明治19年2月から10月までの7ヶ月間勤務した。その短い在職期間のうちに、『北海道巡回紀行』（北海道立図書館所蔵　以下『巡回紀行』）、『青江理事官諸問回答書上・中・下』（函館市中央図書館所蔵　以下『諸問回答書』）を残し、明治中期の北海道を知る上で貴重な記録となっている。道府時代以前の青江の足跡については、福井卓次（1977）の研究がある。

『諸問回答書』は、各戸長役場に村の有力者、気候、産業、沿革について諮問し提出させた際の回答書である。上、中、下三巻からなり、現厚沢部町域を所管する檜山郡俄虫村外六戸戸長役場による「青江理事官御諸問要項」は上巻に収められる。

『巡回紀行』は河野常吉の注記によると、明治19年に北海道庁理事官青江秀が小樽から函館支庁管内を巡回した際の紀行文で、隨行員の新居教二郎の起草とされる。全5巻が存在したようだが、余市～落部間の行程を記した第2巻が欠本となっている。現厚沢部町域への来訪は6月14日で、同日朝、江差の郡役所を出発し、田沢村を経て俄虫戸長役場に到着する。ここで戸長浅田雄二郎と会談し、開発事業についての地城住民の要望を聞いている。その後、館村へ向かい、釜ノ沢（現南館町）の沢口甚右衛門宅で休息した後、館城跡を視察し、鶴村へと抜けた。

『諸問回答書』、『巡回紀行』ともに関係各市町村史等において必ずといって良いほど引用されている史料であるが、館城落城後20年を経ない時期の館地域の様子を知る上で重要であること、特に館城跡視察の記録からは、現在では確認できない遺構の存在も示されていて興味深い。それぞれ関係部分を引用する。

<『青江理事官諸問回答書』>

此村落ノ起原多少増減

（中略）

館村

概村ハ享保四年ノ頃當郡目名村ヨリ移リ、檜山稼ト農業トヲ営ミ、爾來人戸増殖今
七拾二戸アリ。

当地人民ノ将来希望スル事業

(中略)

館村

概村ハ函館江差街道ノ南方ニ位スル一孤村ニシテ、戸数七十二戸。然レモ地味肥沃地積（耕地ニ適用ノ地）殆ト六百町歩ニシテ頗ル農耕ニ適ス。故ニ人民農ヲ專業トシ傍ラ榎業ニ從事スト雖モ、道路艱悪僅二人馬ヲ通スルニ過キス。加フルニ、一帯ノ厚沢部川アリテ降雨或ハ融雪ノ頃ニ八河川忽チ膨張シテ人馬ノ通行ヲ絶ツニ至ル。人民不便ニ堪ヘス、全村字コサナイノ山脈ヲ経テ、目名村ニ至ル新道ヲ改築シテ便益ヲ起サンコトヲ希望ス。

館地域の草分けについて、享保四（1719）年に同じ厚沢部町域の目名村（現字美和）からの移住者としている。明治19年現在の戸数について72戸としている。

住民の希望事項として、コサナイ（現字当路の古佐内川）経由で目名村（現字美和）へ抜ける道路の開削を挙げている。これは、降雨や融雪期に厚沢部川が氾濫し、交通が妨げられるためとされる。

<『北海道巡回紀行』>

（前略）

川ニ沿テ右シ館村ニ向フ。大樹ノ焼痕アリ。山ヲ経シ小流ヲ渡リ館川ヲ渡リ館村字六軒町（六戸ノミナレバナリ）ニ達ス。時ニ二時九分前ナリ。小林治三郎ノ家ニ入テ憩フ。治三郎ノ言ヲ聞クニ、二十年前福山ヨリ稲垣正隆等開墾ノ為ニ来ル。此人等去リシ後、函館ヨリ移住ス。元川向ノ高見ニ居レリ。農業目的ニテ来ルナリ。此地ハ檜材多ク之ヲ伐採シテ厚沢部川ニ出ス。元ハ百石ノ木材ハ百七八十円ナリシカ、今ハ三十円ニ足ラズ。而シテ払下代価十五円ヲ要スルヲ以テ榎業ヲ廢シ開墾ニ從事ス。故ニ今ハ皆貧困ナリ。若シ青木（檜ヲ云フ）ヲ早ク尽キタリシナラバ、斯ル困難ニ陥ラザリシナラン。村書記佐原新二郎來ル。其話ヲ聞クニ、昨年此地未曾有ノ洪水二害セラル。村民ノ常食ハ稗栗ナリ。故ニ食料ニ乏シ草食スルニ至リ、皆餘裕ナシ。此辺融雪度癪疾多シ。治三郎ノ家ニ鍊網アリ。之ヲ間ヘバ、春時、田澤村ニ至テ漁ス。又麻ヲ作り苧ヲ製セリ。新二郎先導シテ進ム。原野ヲ過グ。水田アリ。小流ヲ渡リ原野ヲ経、余ノ来ルヲ聞テ村民出テ道路ヲ掃除セリ。四時三十分、釜沢ニ至リ澤口甚右衛門ノ家ニ憩フ。甚右衛門ハ鰯漁ヲ兼メ、春時伏木戸村ニ至リ漁場ヲ開クト云。其家甚広大ニシテ十間ニ六間ナリ。其用材ハ皆柱ヒ檜等ナリ。之ヲ建築スルニ六百工ヲ費シ、大工二十人ヲ使用セリト言。甚右衛門ノ言ヲ聞クニ、五升芋ハ一反ニ付上作三十俵ヲ収納ス。稗ヲ搗クニハ、先ツ木皮ニ入シ之ラ火ノ上ニ乾カシテ之ヲ搗ク。飯ヲ作ルニハ、米一ト稗二ノ割合ナリト。甚右衛門ノ家ヲ出テ更ニ進ム。村民二三名先頭ス。小流ヲ渡リ大流ヲ過スギ平原ヲ経テ城岱ニ至ル。館藩城址ナリ。丘陵ノ上平行ナル荒野ニシテ樹林蔚茂シテ、中央ニ至レハ城門ノ柱一基猶存シ半焼タルアリ。更ニ進メバ居間入口ノ門ノ頽壊シタルアリ。其他堤防濠渠柵欄等ノ遺址存セリ。此城ハ建築既ニ成ルノ後、維新ニ際シ未ダ福山ヨリ移住セシテ廃毀セリト云。路ヲ北ニ取り、原野ヲ過ギ川ヲ渡リ小流ニツ過ギ、牧馬場ヲ経テ故道ニ接シ山ニ上ル。村民等辞シ去ル。村界ヨリ右シテ山ヲ下リ川ヲ越ヘテ鶴村ニ達ス。時ニ六時十三分ナリ。長尾平治ニ宿ス。

此日行程十二里余。

館村の小林治三郎からは、木材が値下がりしたため、袖業を廃止し開墾に従事するようになったといふ事情を聞いている。また、治三郎及び沢口甚右衛門は、いずれも春には江差方面の浜（治三郎は田沢、甚右衛門は伏木戸）で鮭漁を營んでいることが分かる。

館城跡の光景として、「平坦ナル荒野」、「樹林鬱茂」などの表現から、明治19年の時点では館城跡周辺の開拓事業は進んでいなかったことが明らかである。遺構として、「城門ノ柱一基」、「居間入口ノ門」、「堤防」、「濠渠柵欄」を確認しており、「堤防」は土塁、「濠渠柵欄」は堀と柵列であろう。「居間入口ノ門」の表現から、城内（と青江が理解した箇所）にも門が存在していたことが分かる。

なお、大正11（1922）年の河野常吉による北海道史跡名勝天然記念物調査（河野1924）では、「工作物」として「大手門の門柱の焼株一個」が確認されており、青江の「城門ノ柱一基」に対応する可能性が高い。

（3）『国分館跡』と『北海道旧纂図絵』

国分館跡は、厚沢部町字新栄に所在する。館川と厚沢部川の合流点に位置し、比高差約15mの小丘陵である。中館の丘陵地帯から続く尾根の先端部が独立丘となったものである。目視で確認できる遺構はない。昭和45年に市立函館博物館の吉崎昌一らの調査により埋蔵文化財として認められた。この調査では陶器片を採集したとされるが、現在、これらの遺物の所在は確認できない。

『北海道旧纂図絵卷七』（函館市中央図書館所蔵）は、松前廣長撰著、北見傳治再案纂による。松前廣長所蔵の資料を元に北見傳治が編纂したものと推測され、成立は19世紀後半と考えられる。内容は、主に和人地の地誌である。

北見傳治は嘉永6（1853）年の『御扶持家列席帳・御役人諸向勤姓名帳』（松前町史編集室1974）によると『中書院』の家格であり、「正議隊」にも名を連ねている（『松前藩正義士文書』江差町史編集室1979）。『北海道旧纂図絵』の「国分館」の項を以下に引用する。

北海道十七ヶ館第十四

国分館 榆山郡館村より午の方三町隔て、古名厚沢部といふ小丘にして風景。文安四丁卯年四月、館權太郎源頼重（原註一村上政儀の臣なり）江三郎義盛（原註一村上政儀の臣。館頼重舍弟也。義盛長禄三己卯年夏六月二十六日、夷賊のため上国村川原おろて戦死）。二世江口民部庶（原註一幼小太市）義顯（原註一永世八辛未年夏四月十六日、亀田郡志苔村おろて蝦夷流矢の為戦死）。三世江口權頭（原註一幼小三郎）顕輝（原註一初メ伯父館頼重跡繼後、千倉兄義顯の養繼ト成る）永正十癸酉年夏六月二十七日、顕輝、村上三河守政義相原周防守政胤俱に、松前郡大館蝦夷賊のために兵卒まで以上二十余人戦死後、干此の国分館權頭顕輝跡目、女為るに依て廃滅。子孫は桧山郡江差港漁富長者江口重右衛門といふ。

『北海道旧纂図絵』17箇所の館を取り上げており、その14番目として「国分館」が記述される。国分館の位置は「館村より午の方三町」すなわち館村の南方約300mとされる。現在、「国分館」に比定されている埋蔵文化財抱藏地「国分館跡」（C-03-16）は、当時の館村の中心であった落合（現南館町）からは北北西の方角、直線距離で約3kmであり、一致しない。

文安4（1447）年4月、村上政儀の家臣であった館權太郎源頼重と、同じく政儀の家臣で頼重の弟であ

る江三郎義盛によって築かれた。冒頭の「文安四年四月」は「国分館」の築造年を示すと理解したい。義盛は長禄3(1459)年6月26日に上ノ国で戦死する。義盛の後は子（と思われる）義顯が継ぐ。義顯は永正8(1511)年4月16日に志海苔村（現函館市）における蝦夷との戦闘により死亡する。義顯の後は弟の顯輝が継ぐが、永正10(1513)年6月27日、村上周防守政胤とともに松前大館で蝦夷と戦い、部下20名以上とともに戦死した。顯輝には男子がいなかったため、江口氏は廃絶した。江口氏の子孫は江差の江口重右衛門であるという。

江口一族は、村上政儀の家臣として館村を拠点とした豪族だったようである。長禄三年の初代義盛の戦死は、いわゆる「コシャマインの戦い」として知られる数年に及ぶ戦闘の一部であろう。2代目義顯の戦死は、『松前旧時記』（北海道大学附属図書館所蔵）によれば、永正8年4月16日に宇須之岳、志濃利、与倉前の3館が蝦夷の攻撃を受け陥落、館主が自害する事件が起きており、この戦闘に参加していたと考えられる。3代目顯輝の戦死は、『新羅之記録』（北海道1969）、『福山秘府年暦部』（北海道庁1936）などに記される、蝦夷の大館攻撃によるものであろう。この戦闘により、館主の相原季胤とともに、江口氏の主筋にあたる村上政儀も戦死した。『北海道旧纂図絵』の記述を信用するなら、家督相続者を失い、主筋からの庇護も失ったことにより、江口氏は館主としての権力を失ったといえる。

（4）『報功心血』にみる館城跡（参考資料『報功心血』（抜粋））

原本は所在不明で、函館市中央図書館所蔵の写本からの引用である。写本は、昭和2年の図書館公立化に際して私立時代の蔵書から引き継いだものである（函館市中央図書館田村昌弘氏の教示による）。執筆年は不明であるが、本文中にカッコ書きで「（前著北海史論）」とあり、「北海史論」は、明治26(1893)年刊行の『建勲正蹟北海史論』（今井1893）を指すとみられることから、本書は明治26年以後の執筆であろう。

家祖武田信広の時代から、明治5年までの松前藩史を記し、記述の大半は13代藩主崇広以降の幕末明治維新时期の動乱にあてられる。

著者は松前藩士今井徹、校閲渋谷十郎、池田晃淵である。いずれも松前藩士族で、3人の共著として他に『故田崎東略伝』がある。著者の今井徹は松前藩の測量家として知られる今井八九郎の次男である。著書に『今井信名経歴一班』（東京国立博物館所蔵）、先に紹介した『建勲正蹟北海史論』がある。渋谷十郎は正議隊幹部で、勘解由派の遠藤又左衛門の処分を委任され、江戸藩邸において又左衛門を殺害している（『奉命日誌』江差町史編集室1979、『事蹟書上（渋谷十郎）』北海道大学附属図書館所蔵）。池田晃淵は明治期の歴史家として知られており、その業績は、新藤透（2003）によって明らかにされている。池田は正議隊の一員として松前藩政に重役として携わった後、廃藩置県の際の獄事件（いわゆる「館藩負債事件」）により職を失った。その後、現在の東京大学史料編纂所に連なる組織に就職し、歴史研究を開始している。

『報功心血』によると館城の築城理由として、福山城における防衛上の問題と福山城下の風紀の問題を挙げている。「山を北方に負ひ海を南に瞰下し昔時の天壇」であった臨海という立地条件は「却て艦砲砲撃に便せるものとして要害の寸効もな」く、さらに、港湾として発展したことが「市街の繁華に従て風紀の上に弊害を来たせる」とする。これに比べ、厚沢部川上流である館の地は「海を距ること五里の深達」であり艦砲の脅威がないこと、土卒が農を営むことにより「自然淳朴の風を養成するを得」とする。

館城の築城は、「慶応四年の九月初旬」から、「勘農」の名目により開始された。築城予定地は、「一帯の茅茨」で、「一刈以て平坦」と思われたが、「其径概ね六七尺」の「幾百の巨木」が転倒しており、これを除去するために「頗る苦力を煩はず」状況であった。

館城内には「二大廈（大きな家屋）」が築造され、その外郭線は「空濠」と「濠頭に聳立」した「丈余の間隙なき木柵」によって構成される。「空濠」は「西南東の三面」に巡らされ、「西北に二門」が設けられた。城内に築造された「二大廈」のうち1つは、藩主徳広及び「両夫人」の居室を中心とする「大奥と称するもの」であり、もう一つは「正殿に擬せるの大書院」であった。

館城の築城工事については、慶応4（明治元）年の工事は外郭線とその内側にとどめ、「濠外の如きは鮮雪の期を待つ修築すべきの予想」であった。

藩主徳広は、「慶応四年十月二十八日を以て福山城を発し數日を徑て十一月三日」に館城へ到着した。

松前藩は「木間内の柵門」を館城の「最も重要な防禦点」と捉え、「今井興之丞をして若干の兵を率ひ茲に備へ」させていた。しかし、今井が「江差に出づるの後ち竟に賊兵の襲撃に会」ったため、「賊兵を柵内に進入せしめ」る結果となった。今井は「木間内成柵の残兵に会せるを以てこれを率ひ鶴川の本道より進んで」鶴村の旧幕府軍を攻撃した。偶然、「水牧梅干二十許の兵を以て上俄虫との山道より」同じく鶴村の旧幕府軍を攻撃したため、はからずも「二方面より激戦」となったが、「黄昏に及び彼我ともに戦ひを止め」、松前藩兵は「上下俄虫の両村に分退」した。この戦闘により松前藩側は、死者2名のほか数名の負傷者を出している。

館城への攻撃は、鶴村での戦闘の翌日に開始された。館城の守備兵は「僅かに二十余許り」で、館城は「星塗未た充備せざるのみならず守禦の予備を期せざるの經營」であったため、「其防戦力甚た薄弱」であった。城兵は防戦に努めたが、隊長今井興之丞はじめ、将兵の多くが戦死し、「館城遂に陥いる」こととなった。

（5）「開墾役所跡」とその出土遺物（図5、写真3）

館町市街地と新栄集落のほぼ中間、厚沢部川右岸の段丘面上に位置する。段丘面と厚沢部川氾濫源との比高差は約10mである。

安政年間に松前藩が設置したとされ、厚沢部町史『櫻島—厚沢部町の歩みー』第二巻p84)では古者の覚書として、「高さ四尺の土盛りの垣を廻した六、七十間四方の広さをもつ構内に建てられて」おり、「四ヵ所の出入り口の門」を設け、「構内にある中央の大きな建物は米倉で、その東側の建物は御役所庁舎であって、五間に十間くらいの規模であった」とする。明治21(1888)年に館地区の鷺ノ巣(現字富里)に入植した二木小兒郎(1937)は、「下館の原野には米倉掘立柱の餘墟數十基」や、「館川の沿岸低湿平野地城には須賀川の下流を利用して、輪轤場を貫通する灌漑溝の設計遺跡」(p48)を確認している。昭和42年から開始された開発パイロット事業により、地表面の遺構は消失し、地下の遺構も大きな損傷を受けたと考えられる。工事中に周辺の踏査が行われ、砥石1、金属製品1、陶磁器類、礎石などが出土した(『櫻島—厚沢部町の歩みー』第二巻p86)。陶磁器のうちコンプラ瓶の破片2点が郷土資料館に収蔵されている。

コンプラ瓶はともに呉須でアルファベットが書かれる。図5-1は「JAP」の3文字、2は「A.」の1文字を読みとることができる。コンプラ瓶に書かれる文字としては「JAPANSCHZOYA.」(醤油)と「JAPANSCHZAKY.」(酒)がある。「開墾役所跡」出土のコンプラ瓶のうち2は「JAPANSCHZOYA.」(醤油)に該当する。

道内出土のコンプラ瓶の集成は長沼孝(1997)が行っており、長沼の集成後に確認された新たな出土例を加えて以下に列挙する。なお、参考文献の示されていない遺跡の出典は長沼1997による。

江差町開陽丸、松前町福山城跡(松前町教育委員会1990、1994、1997)、松前町東山遺跡(松前町教育委員会2005)、函館市五稜郭跡(函館市教育委員会1990、2006)、北斗市(旧上磯町)戸切地陣屋跡(北海道文化財保護協会1985、1986)、同じく矢不来天満宮跡(北海道埋蔵文化財センター1988)、伊達市有

珠善光寺2遺跡（伊達市教育委員会2005）、苦小牧市弁天貝塚、別海町野付キラク町遺跡、別海町野付通行屋跡遺跡（別海町教育委員会2007）、根室市穂香川右岸遺跡（北海道埋蔵文化財センター2005）、石狩町聚富川口遺跡、余市町フゴッベ貝塚（北海道埋蔵文化財センター1990）、余市町大川遺跡（余市町教育委員会2000）などで出土している。

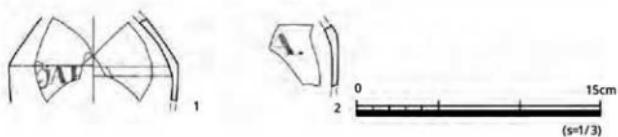


図5 推定「開墾役所跡」出土陶磁器

3. 館城築城の経緯

（1）13代藩主崇広の死去と徳広の藩主就任

松前藩13代藩主松前崇広は、慶応2年4月に病死する（『北門史綱』卷六 永田1991）。

崇広の死後、12代藩主の嫡子徳広が藩主に就任するものの、病弱な徳広は政務を執ることができず、藩政の中核は、松前勘解由など崇広時代の重臣らが掌握したままであった。こうした状況に反発する反勘解由派の藩士達が、『建言書』（『慶応二丙寅十一月旧寄合中より建言書』 江差町史編集室1979）を藩主徳広に上申した。これにより松前勘解由は家老職を辞すこととなるが、反勘解由派の鷹崎民部らは脱藩の罪に問われ、また、藩政は依然として勘解由派が取りしきっていた。

（2）正議隊のクーデター

明治元（1868）年7月28日、反勘解由派の藩士達は、『正議隊建白書』（江差町史編集室1979）を藩主徳広に提出した。『建白書』を受けた徳広は、勘解由ほか4名の重臣の登城を差し止めたが、勘解由らはこれに従わず、町役所に諸士を呼び集め密議を行なったという（『奉命日誌』江差町史編集室1979）。

7月29日、江差奉行尾見雄三が、江差在郷藩士らを率いて江差から出動し、8月1日に福山城下へ到着した（『慶応四年四月より行事見聞録』江差町史編集室1983）。尾見は、かねてから江差在郷の藩士や江差商人團を反勘解由派に引き込んでおり、江差商人團が反勘解由派の資金源となつたとの見解がある（『江差町史』第六巻通説二p 5）。

尾見の到着により勢力を増した正議隊は、8月1日から勘解由派の粛清を開始した。一連の粛清は、9月24日の山下雄城の処刑をもって一段落し、勘解由派の主要人物のほとんどを殺害する結果となった。

（3）館城の築城

勘解由派に対する大量粛清により藩政の実権を手にした正議隊首脳部は、館村への築城を計画した。

『奉命日誌』9月11日の項に「館村へ御築城願書壱通ハ下國東七郎ヲ以テ 太政官へ進達 壱通ハ雄三裁判所へ進達」とあり、館城築城に係る願書が、下國東七郎によって太政官及び箱館裁判所へ提出された。この築城願書に対する新政府築城許可書は11月11日付で交付されている（『江差町史』卷六通説二p36）。『報功心血』（函館市中央図書館蔵）では、「館村移城を決すると雖ども、未だ朝廷の裁可を得ざるの間は、公然たる經營を唱ふる能はず。故に勅農の名に藉りて、これが準備に従はしむるの内儀となり」とあり、鈴木文五郎、牧村可也、今井晦輔、鈴木治郎藏、三浦巽、石塚和平が「準備委員」として「専任」された。『奉命日誌』8月28日の項には、氏家丹宮、鈴木又五郎、牧村可也、今井晦輔、鈴木

治郎蔵、石塚知平、三浦巽らが勘農方として江差表へ出張を命じられ、関川平四郎が御先手組へ取り立てられ、勘定奉行・作事方を命じられたことが記されている。すなわち、館城築城について、8月末の段階では新政府の許可が得られていないため、勘農の名目によって現地作業が開始されたと考えられる。

館城築城工事の経過は、勘定奉行兼作事方を任命された江差の豪商、関川重孝（平四郎）が残した日記によって、うかがい知ることが出来る（江差町史編集室1981）。以下、関川平四郎日記により、館城築城工事の様子を考える。

9月2日に館村の鈴木文五郎に宛てて遠眼鏡を送ったことが記されており、この時期に、担当者が現地入りしていたことを知ることができる。9月14日には、大工四十人・木挽十人が館へ向けて出立している。9月21日には、福山から大工棟梁孝次郎はじめ、下職28名が江差へ到着し、館へ向けて出立している。

また、9月12日頃から土木作業が開始されており、9月23日現在の延べ人工数は、1,525人工に達している。9月28日現在の館城普請に係る人員は、大工棟梁浜田仁兵衛、幸治郎以下、大工小頭五人、木挽2人、平大工92人、下木挽21人、土方小頭7人、土方243人、人足183人となっている。

10月14日には、建具師3人が木材と供に館へ向かっており、また、10月16日には、間似合、唐紙、玉子などの襍材料が館へ送られており、館城普請は、内装作業へと移りつつあったことがわかる。

10月24日には、棟上げの儀式が行われたことが記されており、城内の重要な建物の棟上げが行われたことを知ることができる。10月26日には、七飯峠下での旧幕府軍と新政府軍との戦闘を受けて、三上超順や今井興之丞が、手勢を引き連れて木間内まで出張している。館城普請の最終的な結果については触れられていないが、関川重孝の築城日記もこの10月26日をもって終わっており、この前後に、館城の普請もほぼ終了していたと考えられる。

III章 調査の方法

1. 発掘調査基線（図6）

1988年～1990年の発掘調査グリッドを踏襲することとした。このグリッドは、平成14年の測量法改正以前の旧日本測地系（平面直角座標系X I系）に沿って設定された20m方眼を基本とし、南から北へ向かってA, B, C, …、東から西へ向かって0, 1, 2 …としている。Aラインより南側については、北から南へ向かってZ0, Y0, X0 …とする。0ラインより東は史跡指定範囲外となり、現在のところ、名称を付していない。この方眼は、直交するラインの交点から北西の20m平方を、その交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称し（例：B-2）、さらに10m方眼の小グリッドに分割した。小グリッドは、グリッドの基点となる交点（杭の打設位置）から反時計まわりにa, b, c, dとした（例：B-2-d）。

今年度の発掘調査に使用したグリッド杭は、平成17年に(有)安藤測量設計事務所に委託し、指定地内町有地及び指定地周辺の町道における50m間隔で設置した基線杭のうち、C-10-c及びC-13-bを基準に調査区域へ打設した。

この方眼の日本測地系（平面直角座標系X I系）による平面直角座標は、

C-10-c : X=-235850.000 Y=7950.000

C-13-b : X=-235850.0001 Y=7900.000 である。

測量法の改正に伴い、それまでの平面直角座標系（昭和43年建設省告示3059号）は廃止され、新たに世界測地系に基づく平面直角座標系（平成14年国土交通省告示第9号）である「日本測地系2000」が平成14年4月1日から施行されたため、基線杭設置の成果は世界測地系による平面直角座標として表示する。

世界測地系（平面直角座標X I系）による平面直角座標は、

C-10-c : X=-235593.581 Y=7656.680

C-13-b : X=-235593.580 Y=7606.679 である。

2. 調査の方法

(1) 挖削

全て手作業で行った。表土（I層）のうち草の根が及ぶ深度までの掘削はスコップを用い、I層の掘り下げには移植ゴテを使用した。掘削はI層にとどめ、II層以下への掘削は行っていない。

(2) 現地測量

現地での実測図面は縮尺20分の1を基本とした。調査区及びその周辺の地形測量図は100分の1で作図した。

構造の平面測量は、グリッド杭を基準として設定した簡易な水糸遣方により、手作業で行った。水準測量は、水準点が設置された基線杭（「13ライン2」）から直接計測した。使用機材はオートレベルと5mm

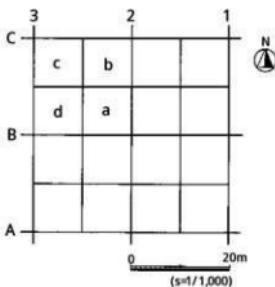


図6 グリッドの呼称方法

目盛りのアルミスタッフで、基線杭と対象との比高を直接観測して行った。

遺物の取り上げは原則として出土グリッド及び層位ごとに行い、グリッド、層位、日付を記録した。グリッドは10m 平方の小グリッド単位での表示を基本とした。

(3) 写真記録

写真記録は調査前、調査状況、遺構等検出状況、土層断面、調査終了状況等を撮影した。撮影機材は、Mamiya RB67 PROFESSIONAL SD (中判フィルムカメラ)+ Mamiya KL65mmF4L 及びNikon D70S (デジタル一眼レフカメラ)+ Nikkor AiAF28mmF2.8D+ Nikkor AiAF50mmF1.4D で、中判カメラでは、120サイズのリバーサルフィルム (フジクローム プロピア 100F(RDP III 120)) 及び白黒フィルム (フジ ネオパン100アクロス120) を使用した。デジタル一眼レフカメラは、2240×1488ピクセルのJPEG形式で撮影・保存した。

遺物撮影も同様のシステムを使用し、中判カメラではリバーサルフィルム (フジクローム T64 (RTP120)) を使用した。

写真記録は、原則として、中判カメラ、デジタルカメラともに同一カットを撮影し、デジタルカメラでは、この他に、調査状況写真や途中経過写真等を撮影し、調査記録の一助として活用した。

(4) 1次整理

出土遺物は、調査終了後に水洗し、分類、一覧表作成、注記等の一次整理作業を行った。注記は遺跡名 (TJ07)、遺構またはグリッド名称、層位の順に、白または黒のポスターカラーで記入し、その上にラッカーペイントを塗布して保護した。

(5) 2次整理

現地測量図面は、必要な訂正や変更を加え、1 mm方眼紙に清書して素図を作成した。

写真記録のうち、リバーサル及び白黒フィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、撮影時の記録 (日付、撮影方向、撮影対象) をシールに記入し、ネガシートの上からそれぞれのフィルムに貼付けした。デジタルカメラ撮影分は、必要性の高いものをL判 (12.5cm×8.7cm) に出力し、アルバムに収納した。オリジナルデータは、CD-R に保存した。

(6) 保管

出土遺物は整理作業終了後に遺物登録台帳を作成し、掲載・非掲載、遺構・包含層、分類、出土グリッドなどの基準で分別して収納し、さらに、厚沢部町郷土資料館収蔵品として、コンテナ、ダンボールなどの梱包単位毎に「厚沢部町郷土資料館収蔵資料台帳」に登録した。

原図・素図等の図面類、写真記録は厚沢部町教育委員会で保管する。

3. 基本層序 (図7)

基本層序の分類は、『館城跡 遺構確認調査報告書』(厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所1989年) のそれ (以下旧層序) を踏襲した。なお、基本層序の土色、土性は、平成17年調査の南側盛土西部 (第1調査区) における断面観察の結果を基準としている (厚沢部町教育委員会2007-図8参照)。

遺物包含層はI層及びII層で、III層以下は腐植土の発達しない旧石器時代以前の堆積層の可能性が高い。

I層：表土・耕作土 黒褐色 (10YR2/2) 塙壌土 粘性中 堅密度堅

草の根の混じる地表面下約10cmの自然堆積層及び耕作土を総称した。旧層序I層に相当。

II-1層：黒色 (10YR2/1) 塙壌土 粘性中 堅密度堅

旧層序II層に相当。

II-2層：にぶい黄橙色（10YR6/4）砂壌土 粘性弱 堅密度軟

降下火山灰と考えられる砂質の堆積層である。遺跡周辺では、平坦地で約5cmの層厚が一般的のようである。旧層序Ⅲ層に相当。

II-3層：黒褐色（10YR2/3）埴壌土 粘性中 堅密度堅

土性はII-1層に似る。黄色味を帯びるのはII-2層の影響と推測する。旧層序IV層に相当。

II-4層：黒色（10YR2/1）埴壌土 粘性中 堅密度堅

土性、土色ともにII-1層によく似るが、土質の粒状性がやや緻密で、土色はやや明るいように感じる。旧層序V層に相当。

III層：褐色（10YR4/6）埴壌土 粘性中 堅密度堅 旧層序VII層に相当

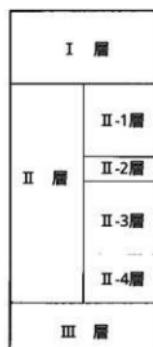


図7 基本層序模式図

IV章 遺構と出土遺物

1. 調査区の概要と目的（図8、写真5）

調査開始当初に12.5ラインに沿って幅2mの調査区を設定した。ここから西側へ拡張した調査区を第1調査区と呼称した。第1調査区から幅2mのセクションベルトを挟んで第2調査区が位置する。第1調査区ではSD1、SD2、SA1～3を検出し、SD1及びSA1が屈曲し北へ延びる状況や、SD2がSD1の屈曲部から約2mのところで途切れる状況を確認した。また、平成2年の調査において検出されたSA3の性格を把握するために、調査区を大きく西側へ拡張した。その結果、SA3は約11m離れて平行に延びるSA2と対になる可能性が高いことが判明した。また、SA2とSD1、SD2との切り合い関係から、SA2及びSA3は館城とは無関係な遺構であることが明らかになった。

第2調査区は、土塁、堀、水路とSD2との関係を確認するために設定した。調査の結果、水路はSD2がほぼ埋没した後に掘削されていることが確認でき、館城跡とは無関係であることが明らかとなった。

第3調査区は、堀と土塁に挟まれたC-11-cグリッド付近でわずかに段差が確認できることから、この段差の性格を解明する目的で設定した。調査の結果、この段差は自然地形である可能性が高いことが明らかになった。

2. 検出遺構（図9～15、写真6～18）

（1）第1調査区東側 SD 1（図9、写真6～8）

規模・形状：検出面開口部で幅約1.2m、底面で幅約0.8m、検出面からの深さ約0.5mである。底面は平らで箱堀状である。壁は約60°の角度で直線的に立ち上がる。

方位：N-80°-W

土層：土層1～4は、Ⅲ層起源の褐色土を高い割合で含む。特に土層2はⅢ層起源の黒褐色土が主体である。土層5～6は、黒褐色土を主体とし、Ⅲ層起源の褐色土を少量含む。

出土遺物：半裁された木柱状の木製品が出土した。SD1のほぼ中央で、SD1と平行に東西方向に長辺を向けて出土した。出土層位は土層6相当で、坑底面に接して出土していることから、SD1掘削後、埋没がそれほど進行しない状況で廃棄又は流入したものである。

考察：土層1～4はⅢ層起源の褐色土を含む均一な土質であることから、埋戻しによる堆積であろう。土層5～6は、黒褐色土を主体とする堆積で細かい互層をなすことから、自然堆積と判断する。出土した木製品は半裁された木柱状の製品で、人為的な廃棄によるものか混入かは判断できない。SA1に使用された柱材の可能性も考えられるが、柱痕の観察から、SA1に用いられた柱材は角材である可能性が高いことから、仮に柵列の部材だとしても、地面に据えられた柱材ではないと考えられる。堀の構築後まもなく廃棄又は混入したと考えられることから、館城跡の施設と関連する木材である可能性は高い。

（2）第1調査区 SD 1屈曲部及び SD 2北西端（図10、写真9～11）

規模・形状：検出面開口部で幅約1.0m、底面で幅約0.6m、検出面からの深さ約0.3mである。平成2年の調査区床面で検出した。床面は平らで箱堀状である。壁は約60°の角度で立ち上がる。南端の立ち上がりは緩やかで、内湾しながら立ち上がる。

方位：N-0°-Wで、ほぼ真北に沿って延びる。

土層：A-A'断面土層1～2及びB-B'断面土層1はⅢ層起源とみられる黄褐色ローム粒を多く含む。A-A'断面土層3～5及びB-B'断面土層2～5は黒褐色土主体で黄褐色ローム粒の混入が比較的少ない。

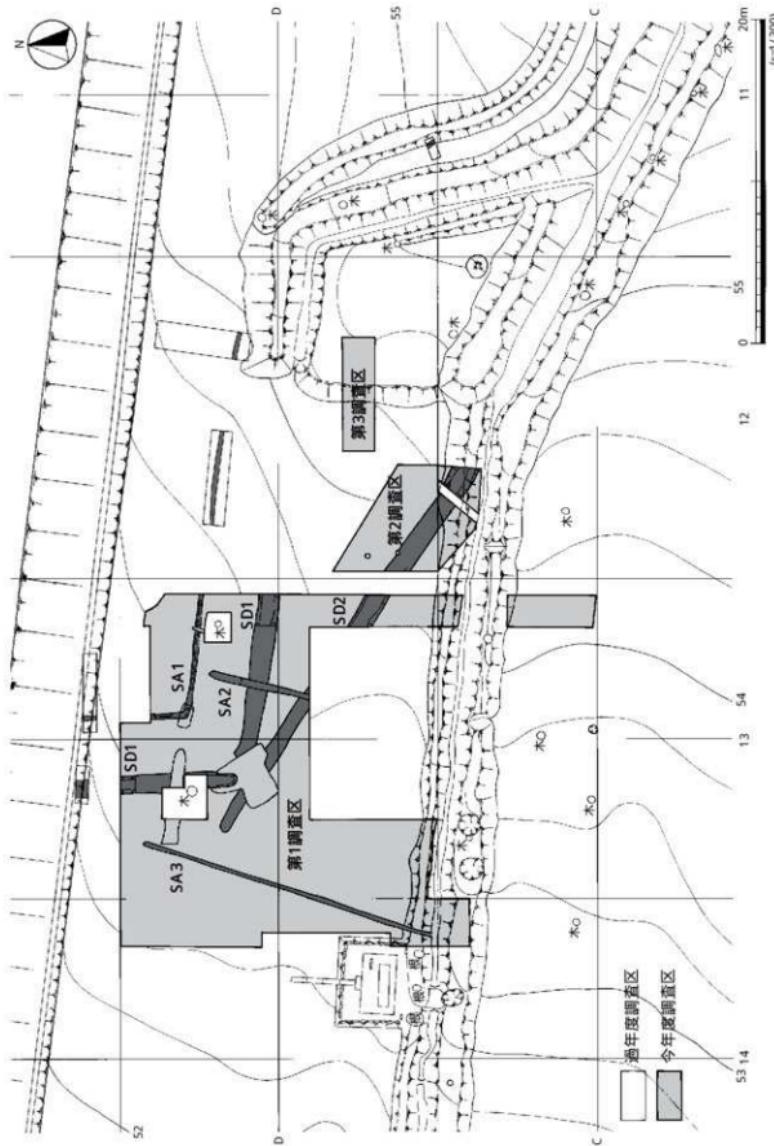


図8 調査区及び造構配置図

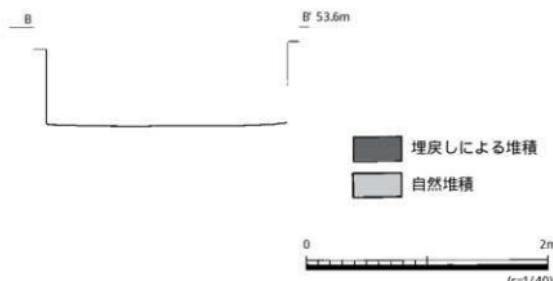
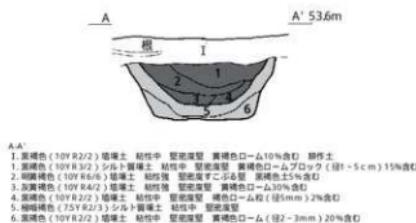
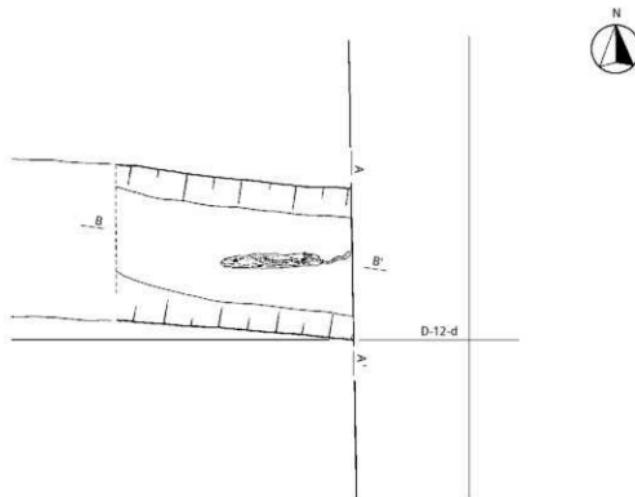


図9 第1調査区東側SD1

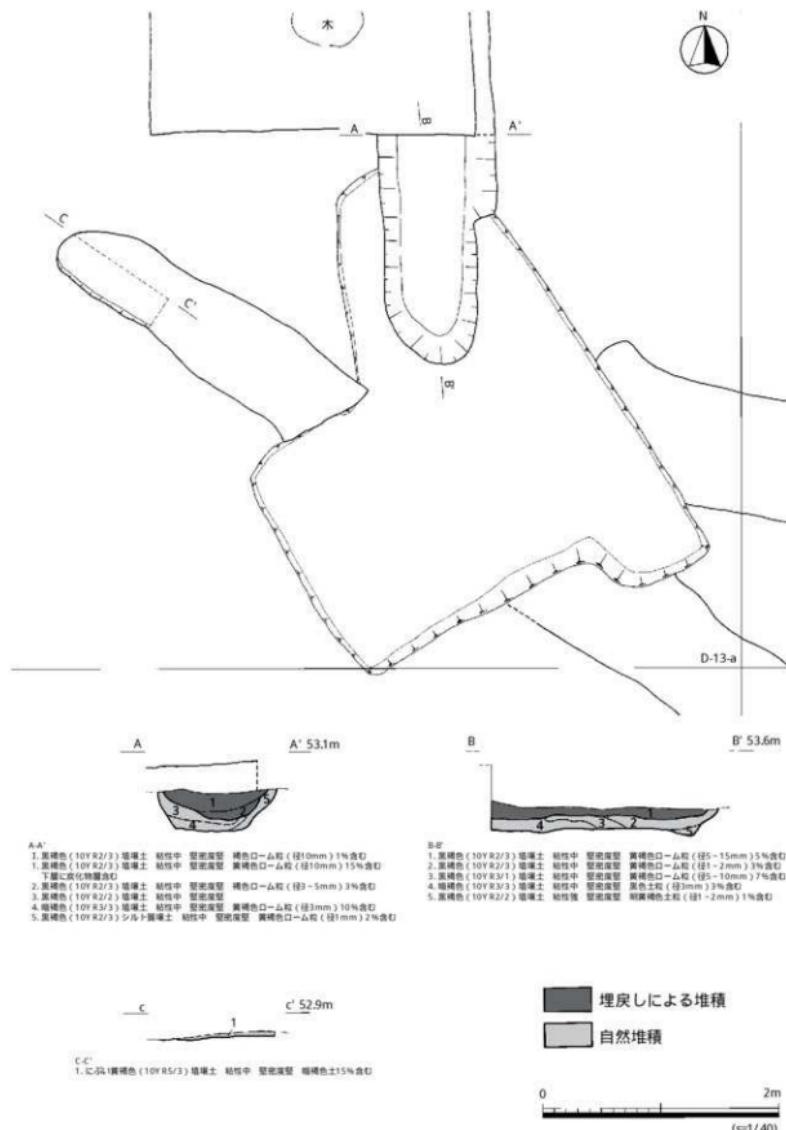


図10 第1調査区 SD1 屈曲部及びSD2 北西端

出土遺物：なし

考察：A-A' 断面土層 1～2 及び B-B' 断面土層 1 は、Ⅲ層起源とみられる黄褐色ローム粒を多く含む均質な土質であることから、埋戻しによる堆積であろう。A-A' 断面土層 3～5 及び B-B' 断面土層 2～5 は、黒褐色土主体で黄褐色ローム粒の混入が比較的少ないと自然堆積と判断する。南端は明らかに立ち上がりを形成し、西から延びる SD1 とはつながらない。東西方向の堀と南北方向の堀の端部が近接して屈曲部を形成するものである。

（3）第2調査区 SD 2（図11、写真12～14）

規模・形状：検出面開口部で幅約1.5m、底面で幅約0.6m、検出面からの深さ約0.6mである。底面は平らで箱堀状である。壁は約50°の角度でやや内湾しながら立ち上がる。

方位：N-55°-W

土層：土層 1 は南側に所在する用水路の堀上げ土である。土層 1～4 はⅢ層起源の褐色土を又は黄褐色ローム粒を多く含む。土層 5～8 は黒褐色土主体で、黄褐色ローム粒をほとんど含まない。底面付近の土層 8 では、細かい互層が確認できる。

出土遺物：なし

考察：土層 1～4 層はⅢ層起源の褐色土又は黄褐色ローム粒を多く含むことから埋戻しによる堆積であろう。土層 5～8 は黄褐色ローム粒をほとんど含まないことから、周辺の包含層の流れ込みによる自然堆積と判断する。土層 8 は細かい互層が確認できることから水性堆積である。本構造とその南側を東西に走る用水路の先後関係は、堀上げ土が SD2 の埋土を覆う形で堆積することから、SD2 → 用水路の順であると断定できる。しかも、SD2 がほぼ埋没しきった後に堀上げ土が堆積していることから、SD2 の構築と用水路の掘削との間にはある程度の時間差があったことが分かる。平成18年調査により堀の埋没年代は大正後期から昭和初期以降と推定されることから、用水路の掘削は SD1 が埋め戻された大正後期から昭和初期以降となろう。

（4）第1調査区 SD 2（図12）

規模・形状：検出面開口部で幅約1.3m、底面で幅約0.9m、検出面からの深さ約0.4mである。底面はやや湾曲気味だが平で箱堀状である。壁は55°の角度で直線的に立ち上がる。

方位：N-60°-W

土層：土層 1 は黒褐色土を主体とし、褐色ローム粒を含む。土層 2～5 は黒色土及び暗褐色土を主体とし、黄褐色ローム粒を少量含む。

出土遺物：なし

考察：土層 1 と土層 2～5 に大別した。いずれも黒色～暗褐色土を主体とし、褐色又は黄褐色ローム粒を含む。主体となる土質及び混入物に大きな違いはない。大別の根拠として土層 1 は比較的均質な堆積であり、これに対して土層 2～5 は混入物が層状に混入することから両者の堆積状況が根本的に異なると判断した。土層 1 は埋戻しによる堆積、土層 2～5 は自然堆積と推測する。

（5）第1調査区 SD 1北端（図13）

規模・形状：検出面開口部で幅約1.2m、底面で幅約0.6m、検出面からの深さ約0.4mである。底面は平で箱堀状である。壁は60°の角度で直線的に立ち上がる。

方位：N-0°-W

土層：土層 1～2 は黒褐色土を主体とし、黄褐色ローム粒を少量含む。ローム粒の混入状況は均質である。土層 3～8 は黒褐色土を主体とし、黄褐色ローム粒を少量含む。土質、混入物は土層 1～2 と似るが、土層 1～2 が均質な堆積であることと比較し、層状に堆積する点が異なる。

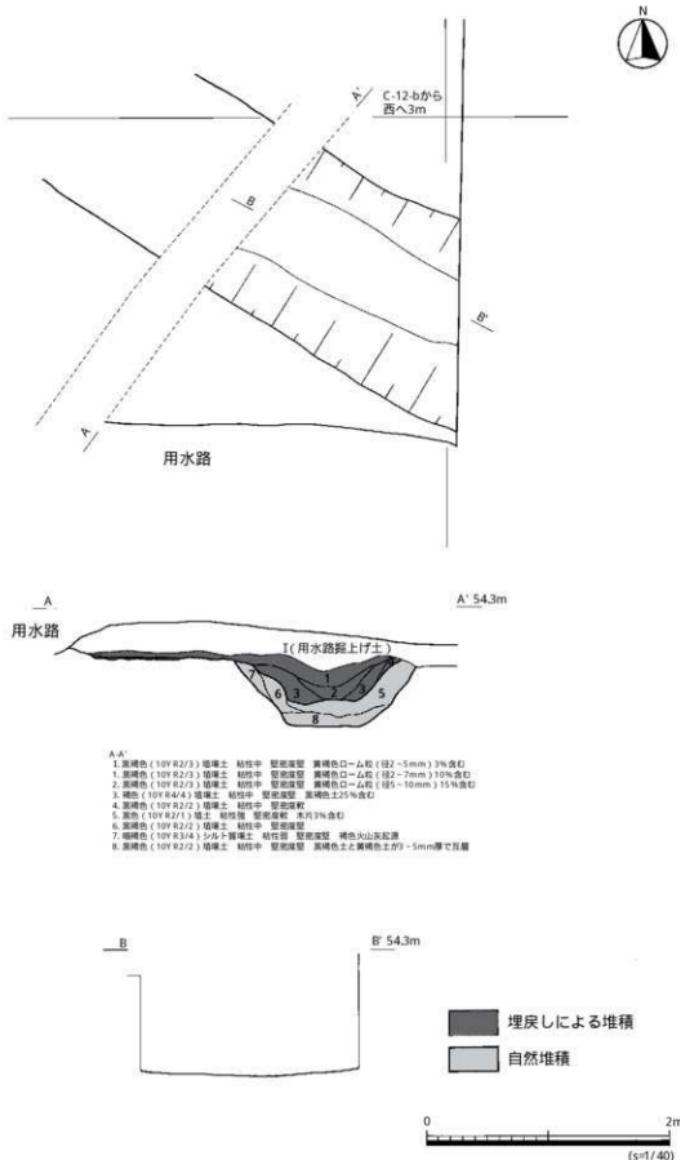


図11 第2調査区 SD2

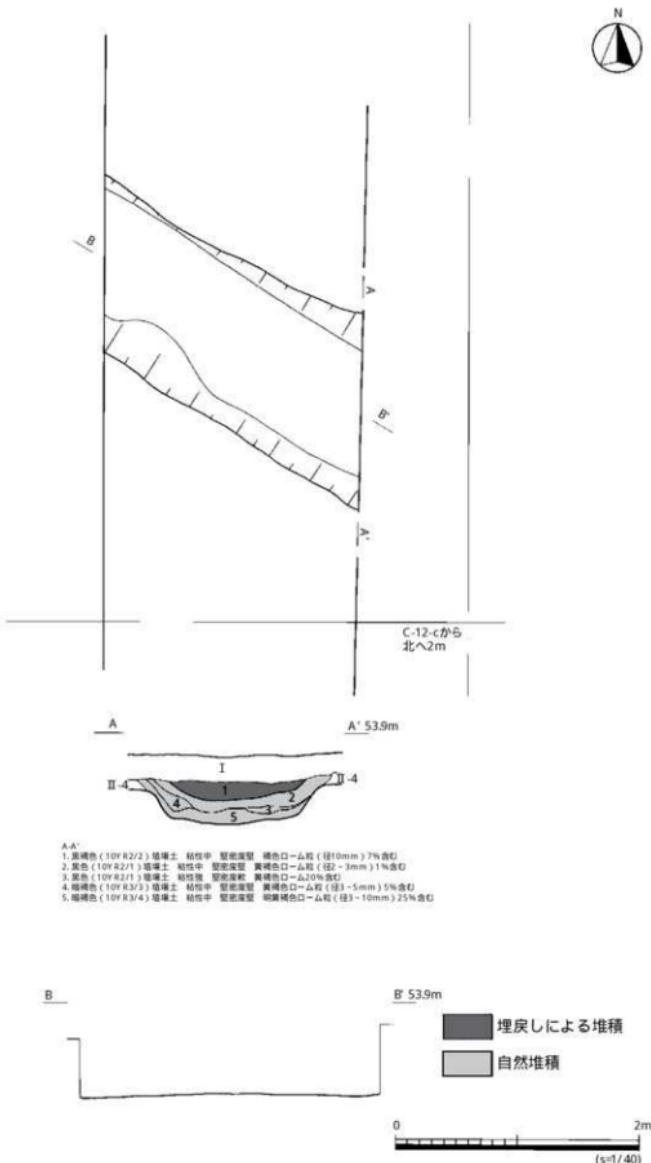
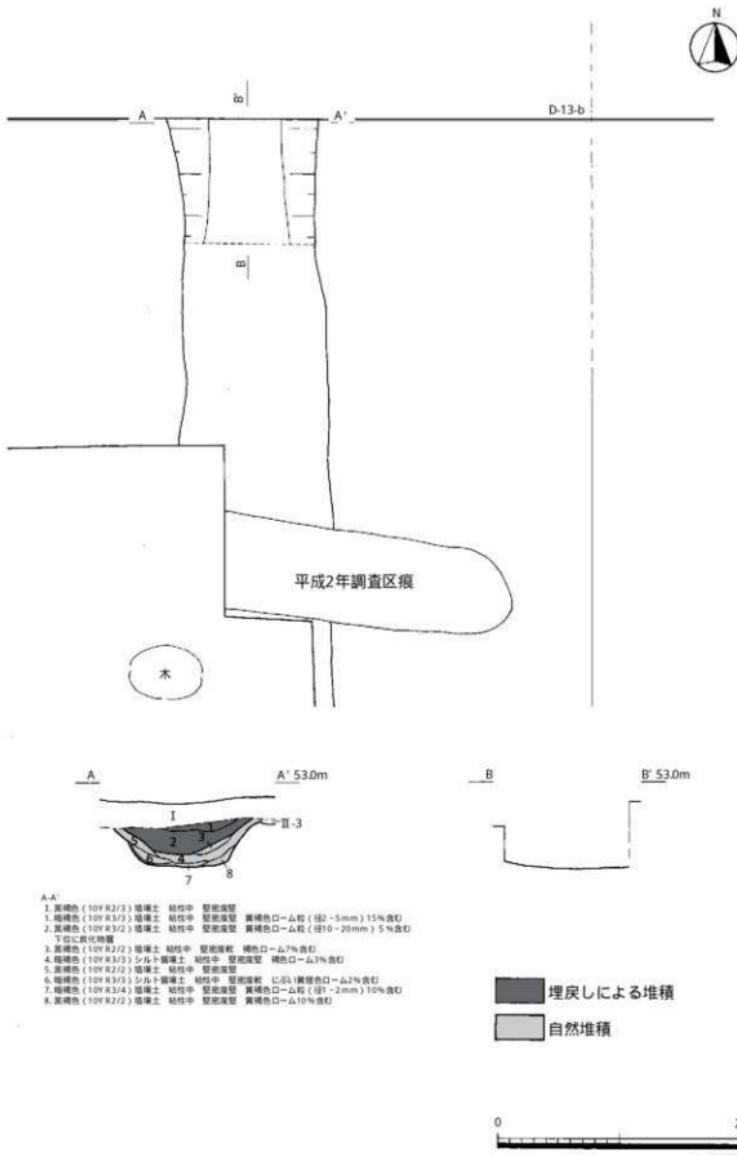


図12 第1調査区 SD2



出土遺物：なし

考察：土層1～2は均質な堆積であることから、埋戻しによる堆積であろう。土層3～8は薄く層状に堆積することから、周辺の包含層の流入による自然堆積と考える。

(6) 第1調査区 SA1 (図14、写真15、16)

規模・形状：布掘の柵列跡である。堀方は検出面で幅約0.3m、検出面からの深さ約0.2mである。柱痕は、直径0.1m～0.2mで、0.15m前後がもっとも多い。柱痕の形状は、正方形、長方形、円形、橢円形があり、正方形が最も多い。

方位：D-13°-b付近で直角に屈曲する。東西方向に延びる部分でN-82°-W、南北方向に延びる部分でN-3°-Eである。

土層：土層1～6は柱痕、土層7が堀方埋土である。柱痕は土層4を除いて床面まで到達する。柱痕から木質は検出できなかった。

出土遺物：なし

考察：柱痕の平面形及び直径から推測して、柵列に据えられた柱は5寸角材であった可能性が高い。柱の間隔は、密な部分と疎らな部分があるが、疎らな部分については検出漏れが考えられる。一連の柵列において、これほど柱間距離にばらつきが生じることは考えにくいことから、比較的密な部分で確認できる柱穴配置が当時の配列に近いと推測する。

(7) 第1調査区 SA2、SA3 (図15、写真17、18)

規模・形状：SA2は検出面で幅約0.3m、検出面からの深さ約0.3m、SA3は検出面で幅約0.25m、検出面からの深さ約0.3mである。ともに北端を確認した。SA3の南端は近代以降に構築された用水路に接続する。SA2の南端は確認していない。SA2はSD1、SD2と交差し、これらを切って掘り込まれる。

方位：SA2はN-14°-E、SA3はN-18°-Eである。

土層：SA2 土層1～3及びSA3 土層1～3はいずれも黒褐色土を主体とし、黄褐色ローム粒を含む。

出土遺物：SA2の坑底で木材を検出した。

考察：SA2及びSA3は互いに平行に延び、北端部についても平行することから、同時期に構築された一対の遺構と推測する。SA2がSD1及びSD2を切って掘り込まれることから、SD1及びSD2が完全に埋没してから構築されたものである。SD1は、平成18年の発掘調査により大正時代後期から遅くとも昭和初期までは埋められたと考えられることから、本遺構の形成年代はこの時期以降と推測できる。黄褐色ロームを多く含む埋土の特徴から、掘削直後に人为的に埋め戻されたものである。遺構の性格ははっきりしないが、SA2の壌底面から出土した木材は、細長い樋状であることから、暗渠排水の可能性が考えられる。

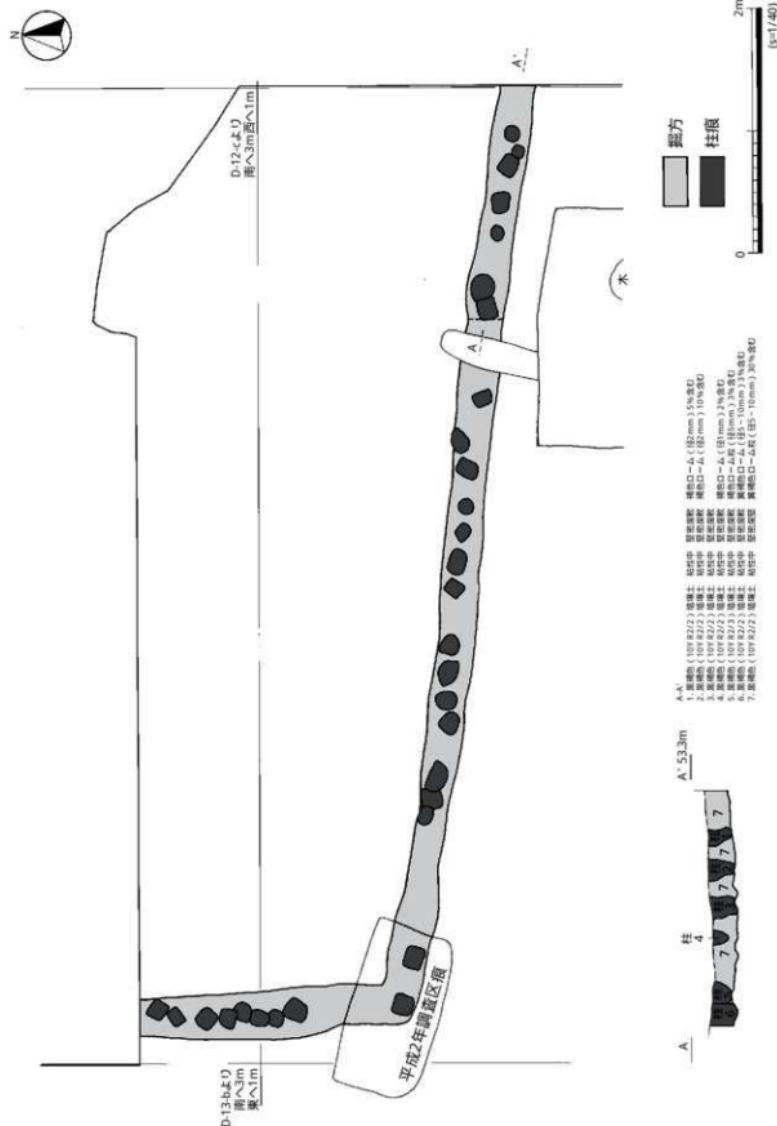
3. 遺構出土遺物及び包含層出土遺物 (図16～18、写真19～22)

(1) SD1 出土木製品 (図16、写真19、20)

1はSD1坑底から出土した木製品である。直径5寸程度の丸太を半裁又は3分した一片である。表面は炭化している。表面に明瞭な加工痕は確認できない。樹種同定の結果、エノキ属と鑑定された。

(2) 包含層出土陶磁器 (図17、写真21)

2～7は近代陶磁器である。2は筒形碗で外面口縁部直下に緑色の二重線が描かれる。3～6はいわゆる「飯茶碗」である。4は無文で透明感の少ない釉が施される。5は「寿」と思われる字が外面に書かれる。6は印刷による扇文、菊花文が描かれる。7は皿で確認できる範囲では無文。底部見込みは釉剥ぎがなされる。8は幕末期の関西系の土瓶蓋である。外面施釉され、内面は露胎。



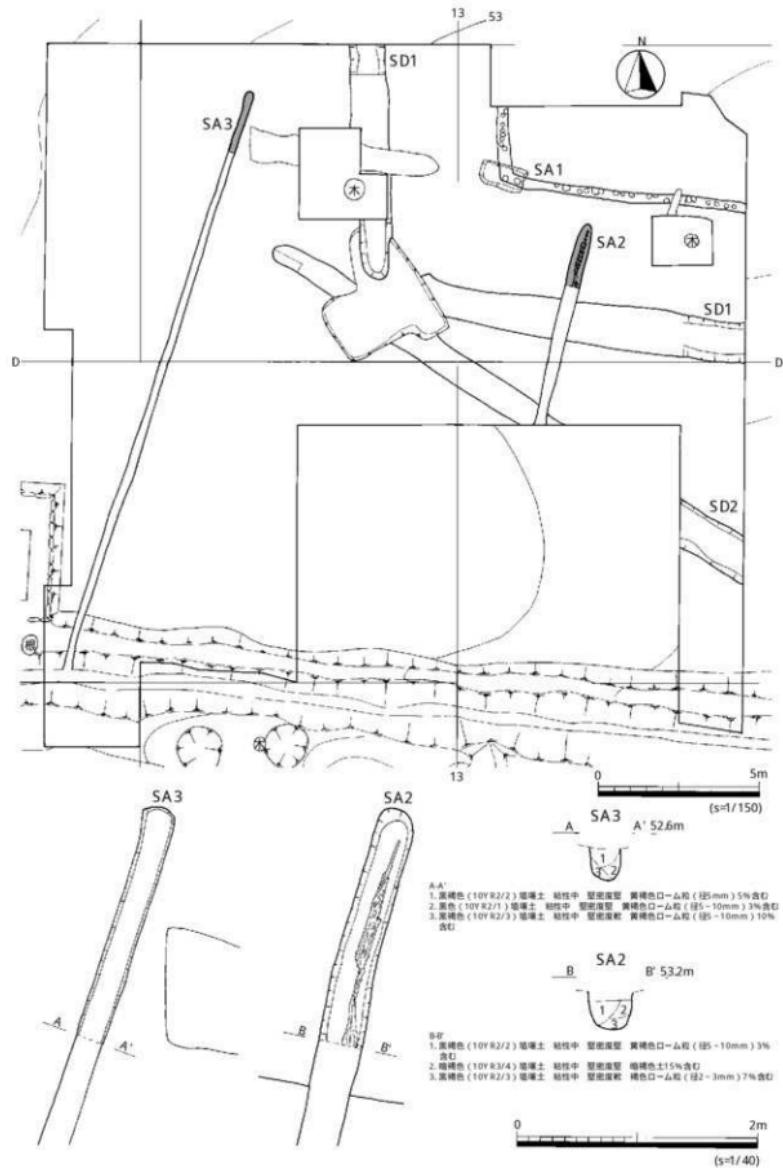


図15 第1調査区 SA2、SA3

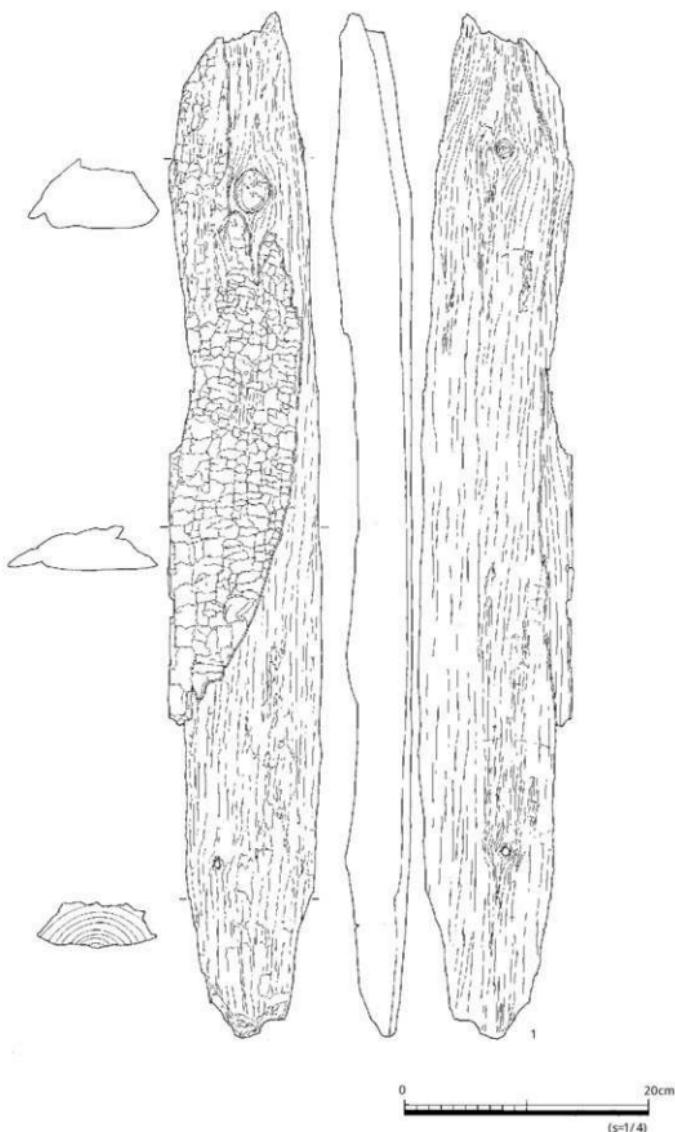


図16 SD1 出土木製品

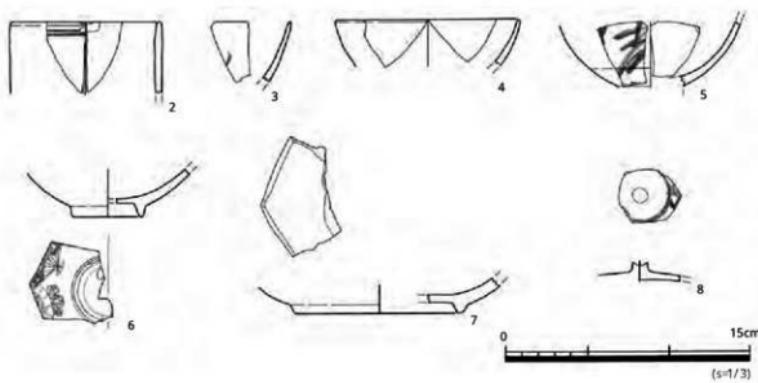


图17 包含层出土陶器

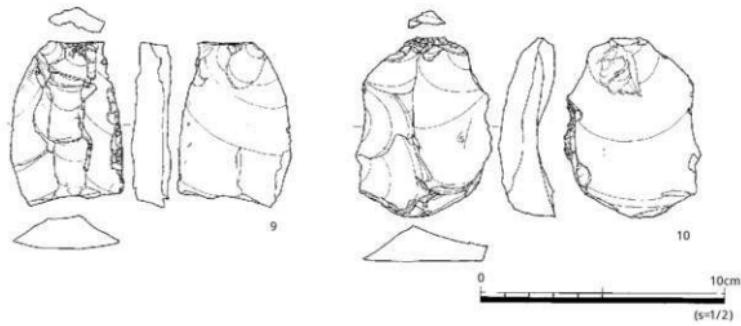


图18 包含层出土石器

(3) 包含層出土石器 (図18、写真22)

9～10は頁岩製のスクレイパーである。ともに二次加工痕がほとんど確認できない。9では背面右側縁、10では腹面左側縁に二次加工痕が確認できる。

表1 SD1出土遺物（木製品）一覧

掲載番号	写真	層位	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
図16-1	写19.20	坑底面	木材	83.8	12.4	5.2	上下端欠損 半裁丸太

表2 包含層出土遺物（陶磁器）一覧

掲載番号	写真	グリッド	層位	時期	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
図17-2	写21-2	D-13-d	I層	近代	磁器色絵	筒形碗	9.0			外面口縁部直下に二重線
図17-3	写21-3	C-12-b	I層	近代	磁器染付	碗				
図17-4	写21-4	C-12-b	I層	近代	磁器	碗				胎土透明感低い
図17-5	写21-5	C-13-b	I層	近代	磁器色絵	碗				外面「寿」呉須書
図17-6	写21-6	D-12-d	I層	近代	磁器色絵	碗				外面扇文、菊花文
図17-7	写21-7	D-13-b	I層	近代	磁器染付	皿		9.9		底部見込み蛇の目状と思われる釉剥ぎ
図17-8	写21-8	D-13-a	I層	幕末	関西系	土瓶蓋				内面露胎

表3 包含層出土遺物（石器）一覧

掲載番号	写真	グリッド	層位	分類	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
図18-9	写22-9	D-13-d	I層	スクレイパー	頁岩	6.8	4.5	1.4	51.0	
図18-10	写22-10	D-13-a	I層	スクレイパー	頁岩	7.3	5.6	1.5	62.0	

表4 包含層出土遺物集計

種別	碗	皿	瓶類	土瓶蓋	釘	スクレイパー	フレイク	不明 その他	総計
陶器				1					1
近代陶磁器	8	5						2	15
ガラス製品			1					1	2
金属製品					1			4	5
石器						2	1		3
木製品								1	1
統計	8	5	1	1	1	2	1	8	27

V章 自然科学的分析

1. 館城跡の花粉化石

株式会社パレオ・ラボ

鈴木 茂

はじめに

館城跡において行われた発掘調査で、明治元(1868)年に築城された館城跡に伴う堀が検出され、この堀より2年度にわたり土壤試料が採取された。以下にはこの土壤試料を用いて行った花粉分析結果について記し、遺跡周辺の古植生について検討した。

(1) 試料と分析方法

試料は堀遺構 SD1 の異なる地点の堀底付近より採取された2試料(試料No.1,2)である。各試料について、No.1(平成18年度調査地点 TJ06-SD1)は黒褐色の砂質粘土～シルトで、明黄褐色のローム粒が混入している。No.2(平成19年度調査地点 TJ07-SD1)は黒褐色の砂質粘土で、細かな植物遺体が少し認められる。これら2試料の堆積年代は明治元年から昭和初期までの期間と推測されている。花粉分析はこれら2試料について以下のような手順に従って行った。

試料(湿重約5g)を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトトリス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣よりマイクロビペットを用いて適宜プレバラートを作成して行い、その際サフランにて染色を施した。

(2) 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉25、草本花粉14、形態分類を含むシダ植物胞子4の総計43である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表に、それらの分布を図に示した。なお分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基準とした百分率で示してある。また図や表においてハイフン(–)で結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示しており、バラ科の花粉には樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、No.1ではコナラ属コナラ亜属が最も多く検出され、出現率は40%を越えている。次いで10%を越えてハンノキ属が多く観察されている。その他ではサワグルミ属ークルミ属とカエデ属が5~10%の出現率を示しており、ニレ属ーケヤキ属、トチノキ属、ウコギ科などが5%弱を示している。草本類で出現率が10%を越える分類群はなく、最も多いイネ科でも約8%である。その他、カラマツツウ属やヨモギ属などが5%前後を示している。

No.2はカバノキ属の多産で特徴づけられ、出現率は約67%に達している。次いでコナラ亜属が多く、約11%を示している。その他ではハンノキ属とブナが5%前後得られている。草本類ではイネ科がやや多く検出されており、出現率は20%を越えている。その他ではヨモギ属が約3%を示すほかはいずれも1%以下である。

樹木花粉

草木花粉・シダ植物微子

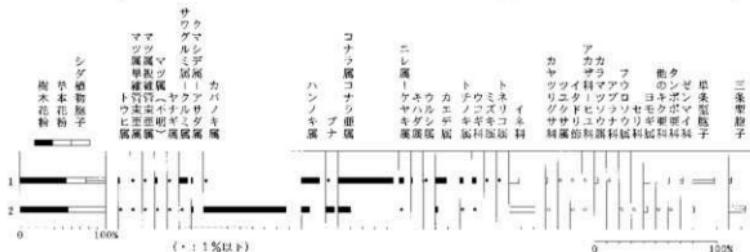


図 館城跡 SD1 の主要花粉化石分布図

(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

(3) 遺跡周辺の古植生

先にも記したが、2試料の堆積時期は築城された明治元年から昭和初期の期間と推測されている。この時期の館城跡周辺丘陵部ではコナラ亜属やカバノキ属、ニレ属一ケヤキ属、ブナ、カエデ属、トチノキ属などが生育する落葉広葉樹林が成立していたと推測される。そのうちNo.1地点ではコナラ亜属が、またNo.2地点ではカバノキ属が目立つ植生であったと推察される。なおカバノキ属の一種であるダケカンバは好陽の開放地に先駆的に侵入し純林を形成する(伊藤 1989)樹種である。このことからNo.2地点におけるカバノキ属の多産についての要因の一つとして、築城に際しそれまで成立していた森林は切り開かれ空き地が広がったことが推測され、そうしたところにダケカンバ(カバノキ属)が侵入したことが考えられよう。

また好湿性のヤナギ属、サワグルミ属—クルミ属、ハンノキ属、トチノキ属が沢状地形周辺などの地下水位の高いところに成育していたことが推測される。さらに草本植生としてはイネ科、カヤツリグサ科、イタドリ節、カラマツソウ属、ヨモギ属、タンボポ亜科、シダ植物などが遺跡周辺に雑草群落を形成していたとみられる。

おわりに

カバノキ属の多産については築城構築に伴う空き地の広がりとそこへのカバノキ属の侵入の可能性が推測された。これについては築城以前の植生を検討することでより明確になると考えられる。神奈川県鎌倉市においては、鎌倉幕府開府以前はスギ林や照葉樹林が優勢であったが、開府とその後の発展に伴いアカマツなどのニヨウマツ類の二次林に変化した様相が明らかとなってきた（鈴木、1999）。ここ館跡においてもそれまで成立していた植生が築城に伴い切り開かれ、カバノキ属の林といった別の植生に変化した可能性が考えられ、そういうた様相を見るのも興味深いものである。今後の調査に期待したい。

引用文献

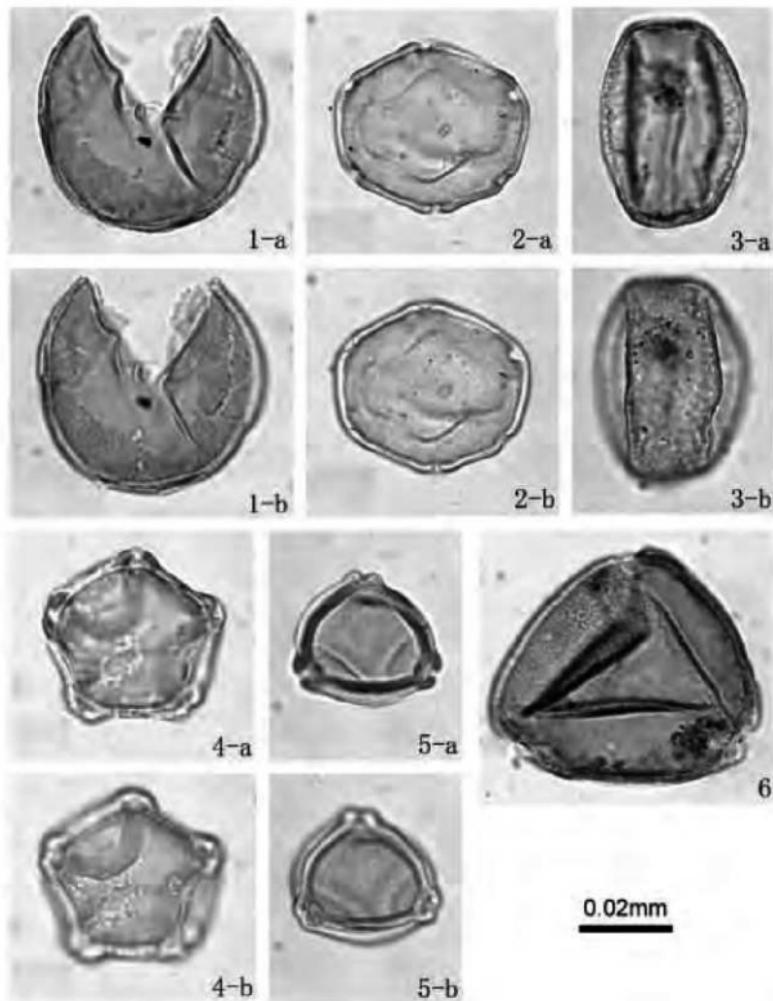
伊藤 浩司 (1989) カバノキ科. 日本の野生植物木本. , 佐竹儀輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫編, 平凡社, 52-65.

鈴木 茂 (1999) 神奈川県鎌倉市における鎌倉時代の森林破壊. 国立歴史民俗博物館研究報告 第81集, 131-139.

表 産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2
樹木			
トウヒ属	<i>Picea</i>	3	1
カラマツ属	<i>Larix</i>	1	-
マツ属早緑管束樹属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	1	1
マツ属遅緑管束樹属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyylon</i>	1	2
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	5	2
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	-	2
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.- C.	1	-
ヤナギ属	<i>Salix</i>	2	1
サワグルミ属-クルミ属	<i>Pterocarya-Juglans</i>	15	2
クマシデ属-アザダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	3	4
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	1
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	198
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	31	19
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	2	21
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	95	31
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	8	2
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	3	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	1	-
カエデ属	<i>Acer</i>	19	5
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	6	1
シナノキ属	<i>Tilia</i>	2	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	1
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	7	1
ミズキ属	<i>Cornus</i>	1	-
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	1	-
草本			
イネ科	<i>Gramineae</i>	31	112
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	5	4
ジユクサ属	<i>Commelinaceae</i>	1	-
イタドリ属	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	1	2
アカザ科-ヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	1	1
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	12	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	1
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	3	-
バラ科	<i>Rosaceae</i>	2	-
フウロソウ属	<i>Geranium</i>	-	1
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	-	3
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	23	17
他のキク科	other Tubuliflorae	4	3
タンボボ科	<i>Liguliflorae</i>	5	4
シダ植物			
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	1	-
ゼンマイ科	<i>Osmundaceae</i>	9	-
单类型孢子	<i>Monolete spore</i>	70	8
三条型孢子	<i>Trilete spore</i>	8	60
樹木花粉			
草木花粉	Arboreal pollen	209	295
シダ植物塵子	Nonarboreal pollen	88	148
花粉・孢子總数	Spores	88	77
不明花粉	Total Pollen & Spores	385	520
不明花粉	Unknown pollen	108	15

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す



図版 館城跡の花粉化石

1 : スギ PLCSS 4415 No.2

2 : サワグルミ属ークルミ属 PLCSS 4411 No.2

3 : コナラ属コナラ亜属 PLCSS 4412 No.2

4 : ハンノキ属 PLCSS 4410 No.2

5 : カバノキ属 PLCSS 4414 No.2

6 : ブナ PLCSS 4413 No.2

2. 館城堀跡出土木材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

藤根 久・中村賢太郎

はじめに

明治元(1868)年に築城された館城跡に伴う堀跡の底から木材が検出された。ここでは、木材の樹種同定を行った。

(1) 試料と方法

木材は、幅12cm、長さ84cmほどの芯を持たない板目材である。木材の出土層位は、堀跡(TJ07-SD1) 覆土最下部の土層6である。館城の築城は明治元年であり、また堀跡が大正から昭和初期に埋め戻されたと考えられることから、木材は明治元年から昭和初期までのある時期に堆積したと考えられる。

同定用の試料は、木材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)について、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、ガムクローラーで封入し永久プレパラートを作成した。プレパラートは、光学顕微鏡で40~400倍下観察し樹種を同定した。

(2) 結果

堀から出土した木材は、落葉広葉樹のエノキ属であった。エノキ属は、落葉性の高木であるが、本州以南の低地から山地に普通に生育するエノキ、北海道以南の山地に生育するエゾエノキ、近畿以西の山地にまれに生育するコバノショウセンエノキ、本州(山口県)や九州(西部海岸)あるいは琉球の山地に生育するクワノハエノキがある。材質は、硬いが強くなく狂い易い弱点がある。エノキやエゾエノキは、建築材や薪炭材に用いられる。

以下に、材組織の特徴記載および同定根拠を示す。

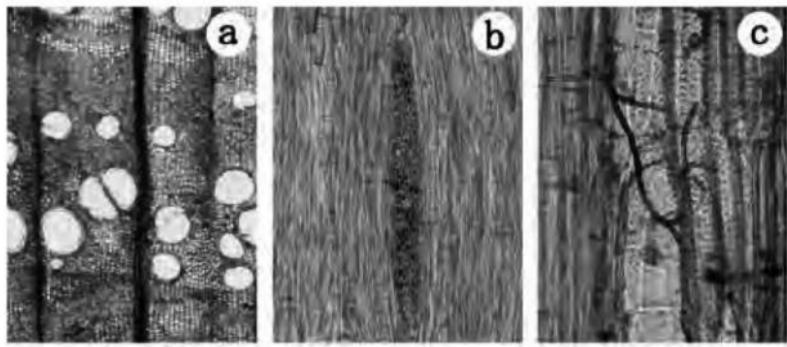
(1) エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版1 a-c

やや大型の管孔が1~3層配列し、その後非常に小型の管孔が多数集合し斜状・接線状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状に密在し、穿孔は單穿孔である。小道管の内壁には明瞭ならせん肥厚が見られる。放射組織は異性で1-6細胞幅、6-55細胞高であり、縁に鞘細胞がある。

(3) 考察

木材は、出土状況から考えて館城築城に関わる可能性が高い。仮に館城の築城に関わるとすれば、館城建築材の一部にエノキ属が用いられたことになる。

なお、エノキ属のうち、エゾエノキが北海道に分布する。しかし、館城跡の2地点において堀跡覆土最下部の土を試料として花粉分析を行なったところ、エノキ属の花粉は1個体も検出されなかった(別稿参照)。明治元年から昭和初期には、館城の側においてエノキ属はまとまった林分を形成していなかったと考えられる。



図版 木材樹種の顕微鏡写真 (a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面)

a-c. エノキ属 (a:250 μ m, b:100 μ m, c:50 μ m)

VI章 調査のまとめ

1. 館城跡南西部の外郭線構造について（写真1、2）

今年度の調査は、平成18年度の調査により西辺の堀が指定地外へ延びることが明らかになったことに伴い、館城跡南西部の堀・柵列の所在を再確認することを目的として実施した。当該地域の堀・柵列は、平成2年の発掘調査によりすでにその概要を把握していたが、昭和23年米軍撮影の航空写真（写真1、2）の観察から、南辺の堀がこれまで知られている以上に西へ延び、より大きな外郭線を形成する可能性を考える必要が生じた。

写真1は昭和23年米軍撮影の館城跡周辺航空写真に、発掘調査により確認されている館城跡外郭線を重ねたものである。これまで確認されている館城跡外郭線は、南辺の堀西部で北西に屈曲する堀の延長が西辺の堀につながるものである。しかし、昭和23年米軍撮影の航空写真からは、北西に屈曲する堀の分岐点からさらに西側へ延びる堀状の黒いラインが確認できる。現存する堀においても、当該地点では堀が二股に分岐している。分岐して西側へ延びる堀の延長を確認する必要性から、今年度の発掘調査区を設定したものである。

結論を先に述べると、昭和23年米軍撮影航空写真で確認した南辺の堀からさらに西側へ延びる黒いラインは、現存する用水路の可能性が高い。発掘調査の結果から、用水路の掘削とSD2の構築には時間差があり、水路の掘削はSD2が人為的に埋め戻されたと推測される大正後期から昭和初期以降のことであることが判明した。用水路とSD2およびそれに伴う土塁との関係を明らかにする必要が残るもの、昭和23年米軍撮影航空写真で確認できる黒いラインは現存する用水路であり、SD2構築から一定の時間を経て掘削されたものである可能性が極めて高いといえる。

2. 花粉分析から推測する館城跡周辺環境について

館城跡の堀底から採取した土壌により花粉分析を実施した（V章「1. 館城跡の花粉化石」参照）。

試料採取地点は、平成18年度調査のSD1（以下「TJ06-SD1」）及び平成19年度調査のSD1（以下「TJ07-SD1」）である。両地点間は直線距離で約60mである。

平成18年度及び19年度調査により確認した堀の堆積構造は、いずれの地点においても堀底から10～20cmまでの土層下位においては、自然堆積層が形成され、その上位に人為的な埋戻しによる堆積層が形成される。

上位の堆積層の形成時期は、TJ06-SD1上位の堆積層から出土した陶磁器、ビール瓶、ガラス瓶等の年代から「大正10(1921)年から昭和10(1935)年頃」（厚沢部町教育委員会2007）と推測している。II章で紹介した青江秀の『北海道巡回紀行』においても、明治19年当時の遺構として「漆渠柵欄」が残存していたとの記述がみられる。したがって、館城跡の堀は、落城後数十年間放置され、大正10年以降、埋め戻されたと考えられる。

分析結果によると、TJ06-SD1採取試料（No.1）からは、コナラ亜属が優先する落葉広葉樹林が成立し、沢状地形周辺などの地下水位の高い箇所にヤナギ属、サワグルミ属ークルミ属、ハンノキ属、トチノキ属の生育する環境が推測されている。TJ07-SD1採取試料（No.2）では、カバノキ属が圧倒的に高い出現率を示していることから、館城築城に伴う空き地の出現と、その後のダケカンバの侵入が推測されている。

『報功心血』(函館市中央図書館所蔵)には、館城築城直前の自然環境として、「一帯の茅茨」で「一刈以て平坦を見るの想ひ」とあり、築城以前にすでに灌木と草本からなる環境が形成されていた可能性がある。周辺の環境については、「北方林巒を負ふて」との記述があり、館城の北方に森林が形成されていったことが読みとれる。『報功心血』からは、館城築城直前の自然環境として、森林に隣接した空き地といった様相をうかがうことができる。

花粉分析の結果から、落葉広葉樹林帯の成立と、空き地の出現によるダケカンバの侵入という2つの異なる自然環境の形成が推測された。分析結果から導き出されたこのような環境が、どの時点における自然環境を示すものなのかは、現時点では特定できない。今後、館城築城以前の環境を判断できるような試料採取を行い、館城の築城とそれに伴う周辺の環境変化について検討していきたい。

3. SD1出土の木製品について

SD1の坑底で半裁ないし3分割された木柱状の木材を検出した。自然面は炭化しているが、半裁された断面は炭化していない。樹種同定によりエノキ属と同定された(V章「2. 館城跡出土木材の樹種同定」)。北海道内でエノキ属に分類される樹種としては、エゾエノキがあるが、館城跡周辺では一般的な樹種とは言えず、花粉分析においても検出されていない。

エノキ属の性質として硬いが強くなく狂いやすい弱点がある。用途としてはケヤキの代替えとして家具材に用いられることが多い。出土状況から堀の城内側約4mのところに位置する柵列の部材の可能性が考えられた。しかし、エゾエノキは建築材として一般ではないこと、館城周辺に豊富に生育していたとは考えられないことから、柵列の部材の可能性は低いであろう。

昭和63年度の発掘調査において柵列の部材と考えられる木材が検出されている(厚沢部著教育委員会1989)。今後、過年度調査資料についても樹種同定を行い、本製品の用途の推定、さらに館城跡を構成する施設に使用された部材についても資料の蓄積を進める必要がある。

4. 今後の課題

今年度の調査で明らかになった館城跡南西部の構造は、二股に分岐した堀がさらに西方で接しながら交差するものである。二股に分岐した2本の堀のうち北西に延びるSD1が館城跡西辺の堀を形成する。西へ延びるSD2はSD1と交差した地点より約4mのところで途切れる。SD1とSD2の間には、2本の堀に囲まれた約260m²の細長い三角形の空間が生じる。この空間の意味については現在のところ不明であり、今後の課題である。

館城跡南西部の構造が明らかになったことにより、残る西辺及び北辺の外郭線の所在確認が急がれる状況となった。これまで蓄積してきた調査成果を活かし、外郭線の確認作業を効率よく進める必要がある。

参考文献

<引用文献>

I 章

厚沢部町教育委員会 2007『館城跡Ⅲ 平成17・18年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』

II 章

厚沢部町史編纂委員会 1969『櫻島－厚沢部町の歩み－』

厚沢部町史編集委員会 1981『櫻島－厚沢部町の歩み－』第二巻

今井徹 1893『建歎正蹟北海史論』富山防書肆

江差町史編集室 1979『江差町史』第三巻史料三 江差町

江差町史編集室 1981『江差町史』第四巻史料四（関川家文書） 江差町

江差町史編集室 1983『江差町史』第六巻通説二 江差町

菊池明 1998『南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記』新人物往来社

工業技術院地質調査所 1975『地域地質研究報告 館地域の地質』

河野常吉 1924『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書』北海道庁編纂（1974『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書』名著出版による復刻版を参照）

新藤透 2003『松前藩出身の歴史学者池田晃潤書誌－経歴と事跡－』『図書館情報メディア研究』第1巻2号

伊達市教育委員会 2005『有珠善光寺2遺跡発掘調査報告書』

永田富智 1991『北門史綱（前承一巻之四より卷之七）』『松前藩と松前－松前町史研究紀要－』松前町史編集室

長沼孝 1997『コンプラ瓶』『考古学による日本歴史 10対外交渉』大塚初重・白石太一郎・西谷正・町田章編 雄山閣

函館市教育委員会 1990『特別史跡五稜郭跡』一箱館奉行所跡発掘調査報告書－

函館市教育委員会 2006『特別史跡五稜郭跡箱館奉行所跡発掘調査報告書』

福井卓次 1977『青江秀について－海軍省時代を中心に－』『新しい道史』第15巻第1号（通巻71号）

二木小児郎 1937『二木小児郎自叙伝 福寿草』（厚沢部町教育研究会社会科サークル 2003『二木小児郎自叙伝 福寿草』復刻版を参照）

別海町教育委員会 2007『野付通行屋跡遺跡Ⅱ』

北海道 1969『新北海道史』第七巻 資料一

北海道開発庁 1970『5万分の1地質図幅説明書 江差』

北海道庁 1996『新撰北海道史 第五巻』（1991『新撰北海道史 第五巻』清文堂出版株式会社 復刻版を参照）

北海道文化財保護協会 1985『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和59年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会

北海道文化財保護協会 1986『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和60年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会

財團法人北海道理蔵文化財センター 1988『上磯町矢不來天満宮跡』北埋調報47

- 財団法人北海道埋蔵文化財センター 1991『フゴッペ貝塚』北埋調報72
財団法人北海道埋蔵文化財センター 2005『根室市穂香川右岸遺跡』北埋調報212
松前町史編集室 1974『松前町史』史料編 第一巻
松前町教育委員会 1990『史跡福山城跡Ⅶ』
松前町教育委員会 1994『史跡福山城XⅡ』
松前町教育委員会 1997『史跡福山城XV』
松前町教育委員会 2005『東山遺跡』
余市町教育委員会 2000『大川遺跡（1998年度）』
吉田武三 1970『三航蝦夷日誌』上巻 吉川弘文館

III章

- 厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所 1989『館城趾 遺構確認調査報告書』
厚沢部町教育委員会 2007『史跡松前氏城跡福山城跡館城跡 館城跡Ⅲ－平成17・18年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書』

V章

*章末に記載

＜その他の参考文献＞

- 厚沢部町教育委員会 1991『館城址 遺構・範囲確認調査－第2・3次調査報告書－』
大橋康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
大橋康二 1994『古伊万里の文様』理工学社
大橋康二 2004『世界をリードした磁器窯 肥前窯』シリーズ「遺跡を学ぶ」005 新泉社
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念誌－』
財団法人 濑戸市埋蔵文化財センター 2002『財団法人 濑戸市埋蔵文化財センター企画展図録 江戸時代の瀬戸窯』
財団法人 濑戸市埋蔵文化財センター 2004『財団法人 濑戸市埋蔵文化財センター企画展図録 江戸時代の瀬戸・美濃窯』

むあるや。この好機を両士に與ひ、以て其衷懃を悉さしむるか如し。両士遂に謀死して西東して相分かるるの心緒は如何ん。乃ち「今朝死別兼生別。惟有皇天后土知」と是れ梅田雲漬の涙痕と一班ならざるを得んや

(六十九) 尺地の死守

鶴村戦後の労を厭はず夜を冒して館城に入りし隊長今井興之丞は、館城の脣衛とし、又外郭とせる木間内柵の敗端は、縱合軍機の枢要に繋るも主務の要所を離れたるは、隊長としての職責は負はざるを得ず、と一たび鶴村に余憤を試みられ、猶に館城に其前責を負はんとするは、國家に奉するの衷亦に背かす。何んぞ其社なるや。而して鶴村の賊兵は、一たび館城を攻むるも城兵能くこれを防ぐ。この時に当り、鶴村残留の賊兵は已に水牧・今井の二方面攻撃を受けるより館城に進撃しある賊兵等其背後を断たるるの虞れあるより為め、急退して鶴村残留の兵に合し、其戦線を張りしものなりき。其明日、又賊兵等館城を攻む。城兵素より事少にして、僅かに二十余余許り。頗る防戦の力を漏せるも、墨渥未た充備せざるのみならず、守禦の予備を期せざるの經營なれば、其防戦力甚た薄弱なるを以て、遂に力尽き、勢ひ極まり、寡兵の能く所ならざれば、各營所に火して、隊長今井興之丞三十五才、隊士三浦義三十七才、土屋猪之進三十五才、佐々木鉄藏三十四才、銃卒小川宇兵衛四十九才、青木源次郎三十四才、松木直吉二十九才、鈴木由五郎二十八才、村松啓蔵三十五才、小原猪藤治十九才、小林又右工門二十三才、皆な戦死し、独り軍事方三上超順三十四才は、この殉難者に後継して短兵戦と激闘し、勇を盡して若干の賊を格殺し、身も亦數傷を負ひ、群賊の為めに斃ると雖とも、其奮迅の勇為なる頗る賊膽

を寒むからしむ。館城遂に陥いるは、實に慶応四年十一月十五日なりき。館城は土木を九月の初めに起し、以來僅かに其日数を屈指すれば七十五日過ぎす。遂に灰燼に帰して趾を留めざりしを看れば、幾千人の汗血を注げるの経営も終に一爐の煙りと消尽し去る。惟り其名を史乘に磅礴せるのみ。所謂彼の蕉翁の俳句なる「夏草や兵ものとの夢の跡」とはなりぬ。館城已に陥るを以て、徳広更に路を転して北岸乙部に徙られ、從て江差も亦敗れて卒に賊徒の侵掠する所となる。而して乙部は僅かに江差を距る三里の沿岸なるのみならず、一簇の村落に過ぎず。敢て守防を為し得るの地形にあらず。徳広乃ち熊石に転次し、回方散逸の残兵を駆て乙部を防禦区城として、大軍監新田主税隊長水牧梅干をしてここを固守せしむるものは、賊兵の逐侵を拒するが為めなり。而して熊石は封境沿岸の北端にして、乙部以北は皆な沿岸の小村落なれはなり。故に熊石に營次し、且つ熊石は防禦に於ける地形の良否を問はず封境の末尾なるより茲を以て一藩死守の地とせられたるも、亦将さに守防の持久を期する能はざればなり。嗚呼、惨なる哉。往々に地なく止まるに編なし。外は一虻蛭の援なく、内は傷殘疲余の兵併せて一百に足らず。豈に死守せざるを得んや。従ひ死守するも亦數旬支ふるを得んや。蓋し慘絕悽絶の語は、この実況を措て又何處にか是れあらん。

(六十八) 様々の訣別

江差の北端なる泊村に次せる徳広は、雄三拙造等の主張する所の南遷の議を否定せられ、軍機は一に鷹崎民部、鈴木織太郎、田崎東等に属し、一藩の死守を徇へしめ、自から館城に還るの中途にして、賊兵已に第村に侵入せるの報あり。乃ち土橋村に次し、兵を分けて之れを撃たしめ、将さに館城の途を開かしめんと。是より先き、函館方面連絡の要路たる木間内の柵門は、館城の唇歯たる枢要の防禦線なるを以て今井興之丞を隊長とし、若干の兵を率ひて茲を成らしむ。この要柵は從来何の防禦設備もなかりし所なれば、更に柵門胸壁を僅かに施設し、猶にこれが充備を要するの緊急なるを以て、今井興之丞其企画する所を折り、将さに設備の充実を効せんと自から馬を馳せて江差に赴けり。而して防禦の後事は大軍監新田主税これか守備に当りたるに、岡らさりき賊兵來襲し、一斉この柵を抜かんとするも、戌兵能く寢を以てこれを防ぎ、遂に賊兵を退せり。賊兵已に前面の道は特に険隘にして進襲甚た不利なるを覚どり、潛かに柵門の左方なる高嶺に攀騰し、柵壁を瞰下して摸撃を加ひらる。茲に追んて、戌兵等頭上よりの狙撃を避くるの掩体なく、右方の樹叢に攀附して応戦するも、寡少の戌兵、彼れの雨霰放下の弾丸に堪ゆる能はず。銃卒長川伝次郎二十一才戰死し、大沢八五郎重傷の為めに後ち死せり。遂に本道より來侵したる賊兵に柵門を破られ、残兵は窮かに野外に由て退却せり。尋ひて賊兵等襲村に侵入し、以て形勢を覗ふか如し。鶴村は平坦の郊原にして、三面に通するの道路に中するを以て、賊兵も亦背後を断たるの虞れあるか為め、其行動を容易ならしめずしてここに次せり。隊長水牧梅干、二十許の兵を以

て上俄虫との山道より鶴村の賊兵を撃ち、隊長今井興之丞、先さに江差に出て木間内柵設備の事を畢り還るの中途、木間内柵の破るるを聞き、切歎憤懣するも亦前敗を補ふの効なく、幸ひ木間内柵の残兵に会せるを以て、これを率ひ鶴川の本道より進んで鶴村の賊兵を撃たんとするに、水牧梅干の攻撃と期せずして二方面より激戦となる。遂に黄昏に迫り、彼我ともに戦ひを止められぬ。水牧梅干の銃卒西村定太郎二十才、今井の銃卒小林豊作二十九才、共に戦死し、猶に銃士石川新吉、岡羊平等負傷し、皆な上下俄虫の両村に分遣せられぬ。而して賊兵鶴村に侵入せるか為め、館城從て危迫に接し、且つ寡兵なるに赴援せんとするの今井興之丞、会く其弟、今井晦輔の来るに接し、相共に国難の終に済ぶへからざるを憤慨し、死は前後迅速あるべしと雖とも、只身を肩にふして説りを遣さざらんことを期すべし、と相共に涙數行、乃ち是れが最後の訣別となれり。余は直ちに夜を冒して館城に入り、当さに木間内柵の前敗を曉はんとす。復た汝を相見ることなかる可し。汝は君鶴屋従の任務なるも、亦敢て節義を誤り、誹りを遺さなかれと其袂袂に臨み、一詩を晦輔に與ひ、遂に館城に赴けり。其詩を茲に載せ興之丞決別の心事を知るへきのみ。

討賊時不利

憤悲何可禁

寧為亡國鬼

百世照誠心

晦輔は曩きに館城經營の任を以て其附近の地理を精悉せるより、水牧梅干の依頼を以て山道の嚮導を為せるものは一時のことなり。故に徳広土橋に次せるの間、其扈從の護衛を缺きしも、事已に終了したれば、徳広の跡を遂ひ会ま、下俄虫村に家兄に邂逅したるは知らず。彼翁亦様々の情を憐

(六十四) 遠大の枢機

速成を要せる館城の經營は、其委員六士か茅茨難然たる荒原に併みし爾來の苦心慘憺を尽せるの結果、二大廈を構造し、一は徳広の居室より両夫人および侍女等に至るの各室、乃ち大奥と称するものにして、所謂閨内なり。其外部は都て近侍の諸臣等執務の局倅を列ねるものにて、只簡易を主とせり。一は正殿に擬せる大書院なり。而して北方林櫓を負ふて西南東の三面は空濠を環らし、丈余の間隙なき木柵を濠頭に駢立したるに過ぎず。

然ども是れ一大工事にして僅々たる兩月間を以て竣成すること最も至難の經營なりき。是を以て未だ外部防備の如きに至ては、豈に短時日の能く為す得る所にあらず。只徳広移転の期を進し、以て其基礎をここに確定し、順次士卒の移住を急進して平和の革新をこの深遠の境に開らき、淳朴の風を養成せられるとの深算なれば、防備の堅要を期すへきに遑あらざればなり。故に經營の畧、其竣成を告ぐるを待ち、徳広率先して移住せられんとする。而して徳広の一行慶應四年十月二十八日を以て福山城を発し、數日を徑て、十一月三日始めて館城に入れり。老職下国安芸松井屯を首として、近習頭兼勘定奉行今井興之丞其他供頭侍臣扈從より親衛隊侍女等總數七十員、相従て移転の途に就けり。福山城は中老職尾見雄三をして城監とし、福山市街東西各村の治安を總管せしめられ、且つ姑らく各局の主務に任するものは猶に依然として其職にあらしむるは、館城に未た何等の局務を執るべき事なく、人烟稀薄一の市街だも亦未た施設する処なればなり。是を所謂幽遠の僻地に設くる別荘的なる光景にして、藩治を視るの程度は猶

に遠かりしを以てなり。況んや有事の設備に至りては、未た何等の見るべきものなし。而して館城の防備とすべきは惟り木間内の柵門にして、乃ち館城の唇齒として恃るに足るべきなり。この一柵は則ち地勢の陥隘と封土の分界なる最も重要な防禦点なりき。蓋し館城其防備の設置なしと雖とも、この木間内柵充備すれば敢て其侵害す被るに至らす。幾んと木間内柵は館城の外郭なりと謂ふも亦當さに不可なるべし。初め賊兵等函館を陥いるの報を伝ひ、徳広館城に入るの後ちはこの柵門を成るもの必須なるより、今井興之丞をして若干の兵を率ひ茲に備へしむ。又新田千里を大軍監として茲に特派せしめたるは、緊切の要なるを以てなり。而して木間内は山河自から天險にして、一夫其路に当れば幾百の兵馬も通過する能はざる防禦上の閾路なり。故に一たびこれを失ふに至れば、館城竟に守るべからざるなり。今井興之丞この柵を成るに方り、施設の緊要あるを以て後事を大軍監新田千里に属して江差に出つるの後ち、竟に賊兵の襲撃に会し、戊兵能くこれを退せしも、賊兵重ねて攻進し、猶に其兵を分けて対岸なる嶺頭より瞰下し、以て狙撃を加ひらるも防禦の設備未だ整はず、寡少の戊兵能く固守するを得んや。銃卒長川伝次郎二十一才、茲に戦死し、銃卒大沢八五郎五十四才、重傷を被むり、後ち死す。この柵遂に破れ、賊徒で鴉村に侵入せり。隊長今井興之丞、江差よりの帰途、下俄虫村にして木間内柵の破れるるを聞き、心算皆な画餅に属し、切歎すれども已に及ばず。余憤遂に其残兵を率ひ、鴉川に沿ふて上流鶴村の賊を撃てり。この時、水牧梅干の一隊、上俄虫村山道よりの攻撃に、期せずして二方面的戦闘となる。噫木間内柵をして二三日の日時を緩ふすれば、設備全く整然し賊兵を柵内に進入せしめざるべきを惜い哉。

りき。故に館藩と指称せらるるものは、この新城の名称に由りしものなり。

(五十七) 養成の基礎

館村移城の議を決すると雖とも、未だ朝廷の裁可を得ざるの間は公然たる経営を唱ふる能はず。故に勸農の名に借りて、これが準備に従はしむるの内議となり、乃ちこの準備委員として次の諸士を専任せられたり。

鈴木 文五郎

牧村 司也

今井 虞輔

鈴木 治郎藏

三浦 翼

石塚 和平

勸農の命を受くるの六士、急遽赴任の途に上り、館村に至れるは實に慶応四年の九月初旬なりき。時方さに晚秋に入り、西風蕭々として満山黄ならざるなく、只看る四山峻嶺として平原を環り、一巨川東より來りて西に貫流し、村落僅かに十余、点々として原の間に有るか如く無きか如く茫茫乎として幽邃の中に炊煙の上れるは、乃ち是れ矮屋なりしを知るのみ。この地厚沢部川五里の上流にして近拓の村落なれば、其稀薄なること敢て異しむに足らずと雖とも、移城十年の後ちは富強自から見るべきものあらん。

苟も黄塵場裏の心目を去らば、所謂彼の桃源に一族の炉煙を創するものに勞煩たらんのみ。而して其城趾に擬すべき地は、山勢の緩延して自から高原をなし、西は館の川を原麓に帶び、北は厚沢部川の巨流を横たひ、東

は小草を負ひ、猶に連樹を北に展べ、漸くに弯回岐錯して天輦も啻ならず。其城壁を為すへきの高原は一帯の茅茨にして、一刈以て平坦を見る想ひあれども、刈るに従ひ茅根に幾百の巨木倒し、其徑概ね六七尺。隨て除けは隨て見はる。これを除却する頗る苦力を煩はずと雖とも、衆力の功遂に排除ししり。乃ち二大廈を經營して、外部は空濠を環らし、濠頭に径尺の九木を併列して、僅かに牙城の形勢を規模し、西北に二門を以て積畠砦の一片を成せり。濠外の如きは解雪の期を待つ修築すべきの予想なりき。噫この挙たるや尋常經營の比にあらず。事、卒然に出て驟然に為すのみならず、素より木石の供給糧食の準備なく、加ふるに風雨冷湿の期に方り、この一大起工を僅たる両月間の短期に竣工を待つ修築すべきの予想なりき。能く其成績を觀るを得んが、苟も六士の指揮其幾百なる匠工を督励せらるるの事為に推想せば、戦時の折衝と雖とも、亦これに過ぐる所やあらん。顧ふに獻身的なる志士等の活動力を茲に極るものは皆な忠実の精神基致す所にして、意氣の壯なる亦以て見るべし。而してこの經營たるや専ら德広の移城を主とするにありて、一時其根蒂を茲に定むれば從て士卒の移転を漸成せしむるのみならず、庶民も亦、自から其堵を茲に安んするの理にして、前途甚だ多望なるものあればなり。苟も難大相伝ふるの一城市たらしむるも、固に其根蒂あるより来れる結果なり。是を以て一時にこれが速成を期せられしものにして、有事の警備に至ては、未だ其配置を效すへき余力なきのみならず、この短時日の能く為す所にあらず。然れども警備のなからざるへからざるは固より予期する所ありと雖とも、深遠の僻村已に霜雪の時にしあれば、如何なる奮進力を以てするも、亦意に成す能はされはなり。彼の武藏野の今日あるに想到すれば又固に異しむに足らざるなり。

参考資料

報功心血（抜粋）（函館市中央図書館所蔵）

（五十六）士氣の養成

福山城は天正十七年の經營にして歴代の居城なりしも、嘉永二年邊警の頻繁なるより北門鉄鎗の重きに注かれ、幕府は更に築城すべきの命を下したせり。乃ち旧趾に拠り新たに經營せられたるの今日に至り、時勢の推移、自から今昔を異にするのみならず、山を北方に負ひ、海を南に瞰下し、昔時の天塹としたる海湾は、却て船艦砲撃に便せるものとして要害の寸効もなき、且つ港湾なるを以て船舶渦渙し、自から市街の繁華に從て、風紀の上に弊害を来たせること亦歎なからず。士卒の風習自然遊惰に流れ易すぐ、苟も富國強兵の実を擧ぐるの地に適せず。是に於て、西部江差の北東なる厚沢部川の上流館村に移城するの絶好なるを知悉し、其地は海を距ること五里的深遠にして、又巨流の水利を有すれば、士卒半は農事に就き、自然淳朴の風を養成するを得へしと大議茲に一決し、乃ち函館總督府に事状を披き稟請する所あり。遂にこれを朝廷に奏請したり。乃ち提出の文書は次の如し。

北陸ノ臣徳広先代ヨリシテ福山二居城候
所父伊豆代ニ至リ海警騒擾之折柄旧幕府
之令有之補修増築ノ後既二十余年來二候
得共畢竟右ノ城地ハ三方山岳ヲ負ヒ一方
大海ニ臨ミ其狭キ所ハ海濱相距僅二一町

許昔ノ天塹ニ比シ候波瀾モ今日ニ至り候テハ戰艦巨船倏往忽來ノ捷径ニ相成加之
城下ノ人家稠密伏兵待敵ノ除地モ無之若海面ヨリ砲発ニ及候蔚ハ居城ハ勿論街衝トテモ乱擊兵燹之患不可免哉ニ深ク未然ヲ苦慮痛心仕候依之封内之諸所周行熟視為致候処江差属地厚沢部ノ内館ト申ケ所河山ノ流峙天然ノ要害ニ御坐候間旧法ニ拘不拘至簡实用ノ工夫ヲ以テ拮据經營繩墨創立仕右様基本相達候上ハ拓地勸農モ追々手配行届候ノミナラス第一函館府ヘハ道路近易ニシテ当城ノ如ク遠険ニハ無御坐候間一旦緩急有事ノ時ニ当リ小人數二テハ候ヘトモ迅速疾走区々ナカヲ奉竭積年勤王ノ鄙忧モ貫徹仕度奉存候尤当城ノ義ハ其任ニ堪タル者ヲ陣代ニ申付人民ヲ鎮静為致候ハノ一奉兩全ノ義ニ御坐候依之極懼戰慄之至ニ御坐候得共前奉陳上候件々上下一同ノ志願予メ確定仕候間何卒覆載之 皇恩ヲ以テ御重憇被為御採用被仰付度偏ニ奉惣候臣徳広岡下ヲ遥拜シテ誠恐惶頓首謹言

この請願を携帶して、中老職下國東七郎南上し、乃ちは是を奏請したるに、朝議の容るる所となり、遂に允准せられたり。乃ち公然たる館城の主とな

写 真 図 版

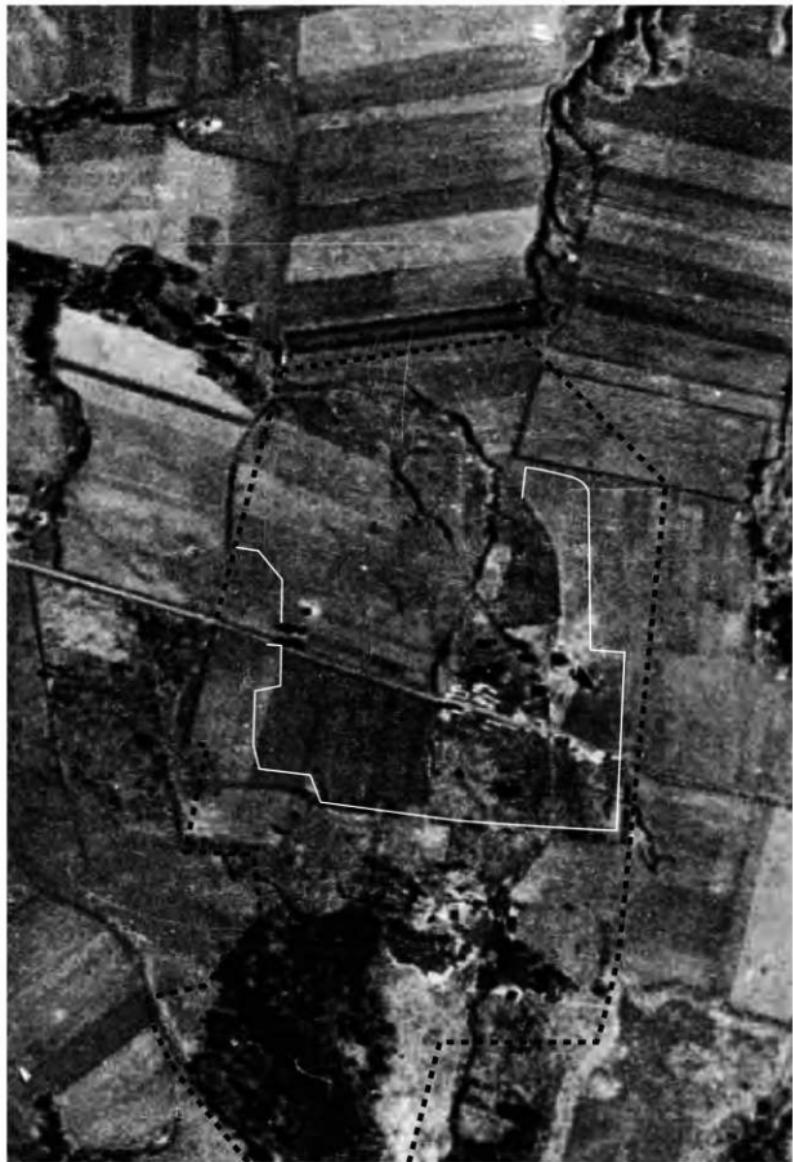


写真 1 館城跡周辺航空写真（昭和23年米軍撮影）

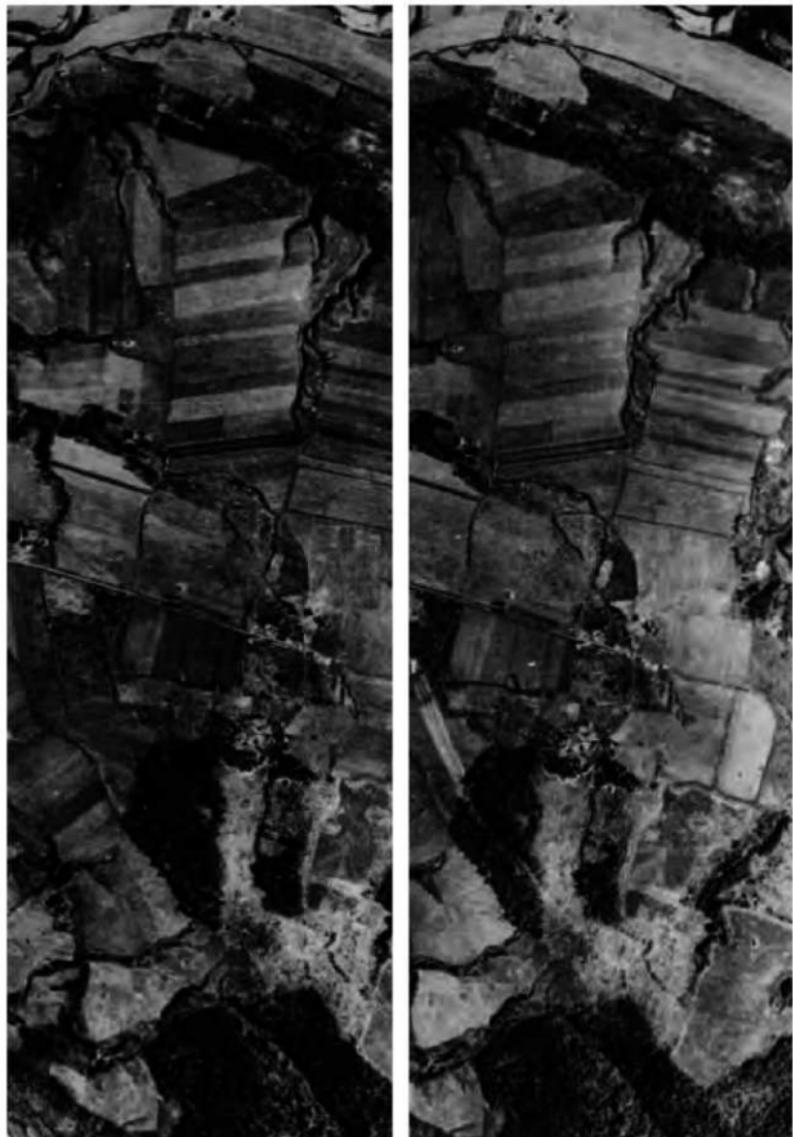


写真 2 館城跡周辺航空実体写真（昭和23年米軍撮影）

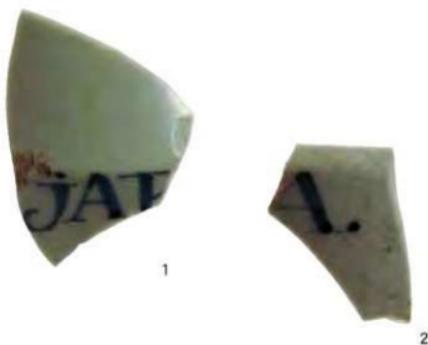


写真3 推定「開墾役所跡」出土コングラ瓶



写真4 城ノ岱全景（平成18年10月2日撮影 西から）



写真 5 調査区全景（南東から）



写真6 第1調査区東側 SD1（西から）

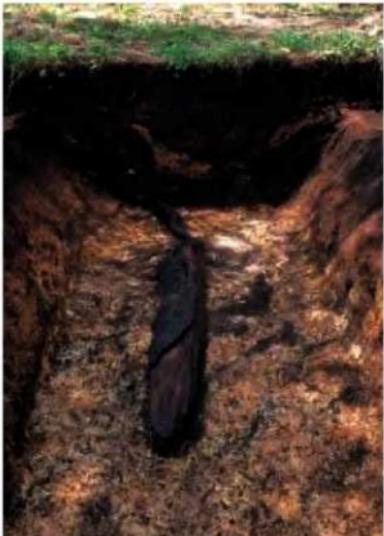


写真7 第1調査区東側 SD1 木材出土状況（東から）



写真8 第1調査区東側 SD1 断面（西から）

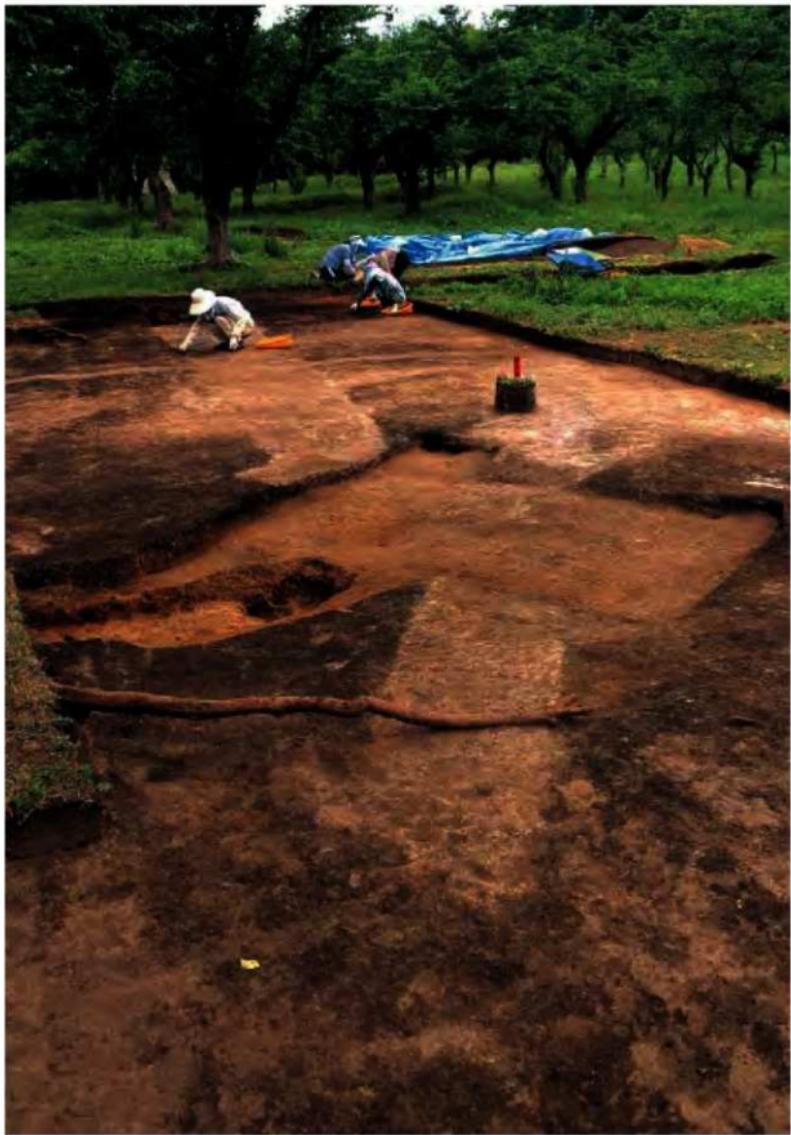


写真9 第1調査区 SD1屈曲部・SD2北西端（北西から）

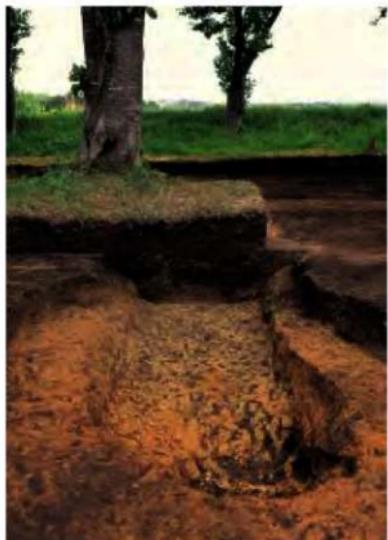


写真10 第1調査区 SD1 屈曲部横断面（南から）

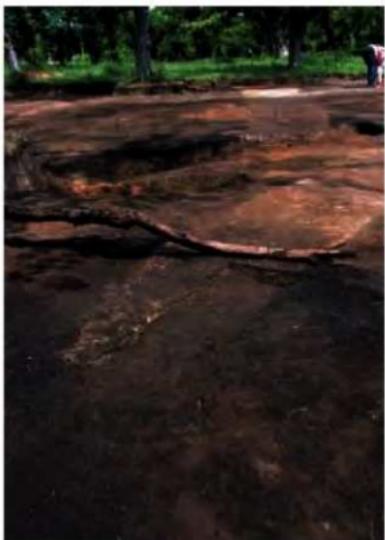


写真11 第1調査区 SD2 北西端断面（西から）



写真12 第2調査区 SD2 検出状況（北西から）



写真13 第2調査区 SD2 と水路の切りい関係（北西から）

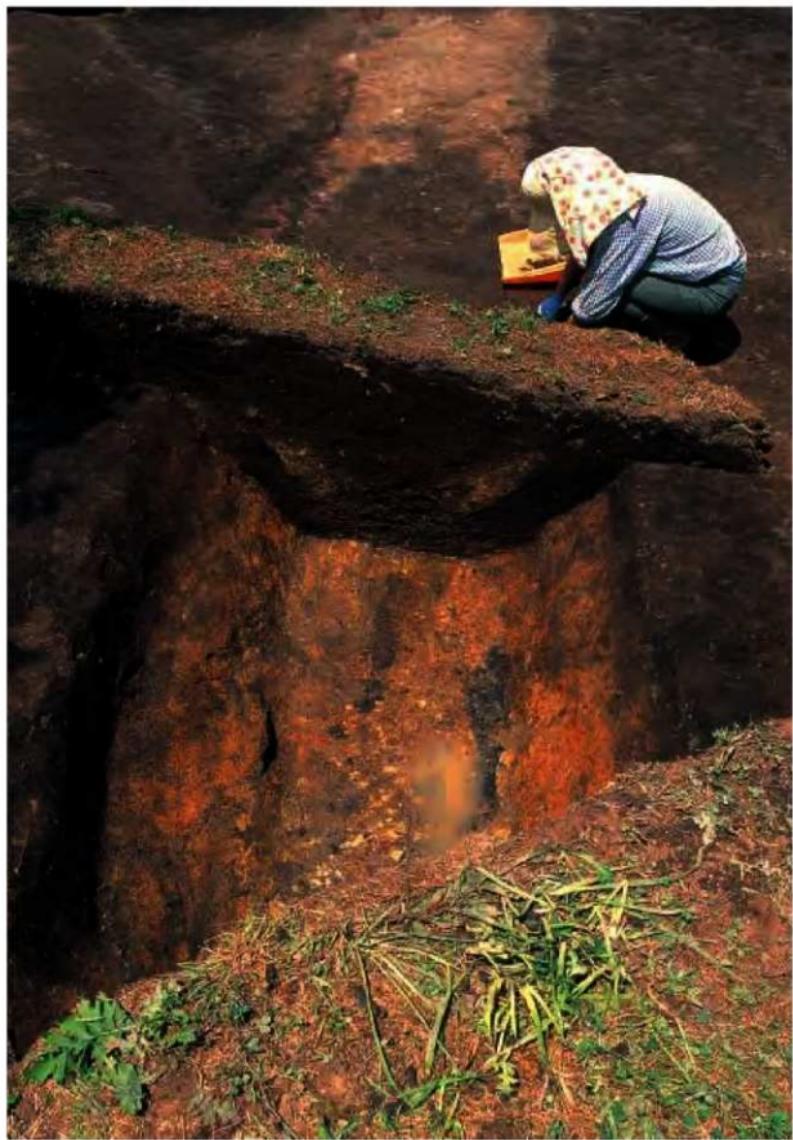


写真14 第2調査区 SD2 断面（南東から）



写真15 第1調査区 SA1 検出状況（東から）



写真16 第1調査区 SA1 断面（北から）



写真17 第1調査区 SA2 検出状況（北から）



写真18 第1調査区 SA3 検出状況（北から）



写真19 SD1 出土木製品



写真20 SD1 出土木製品断面

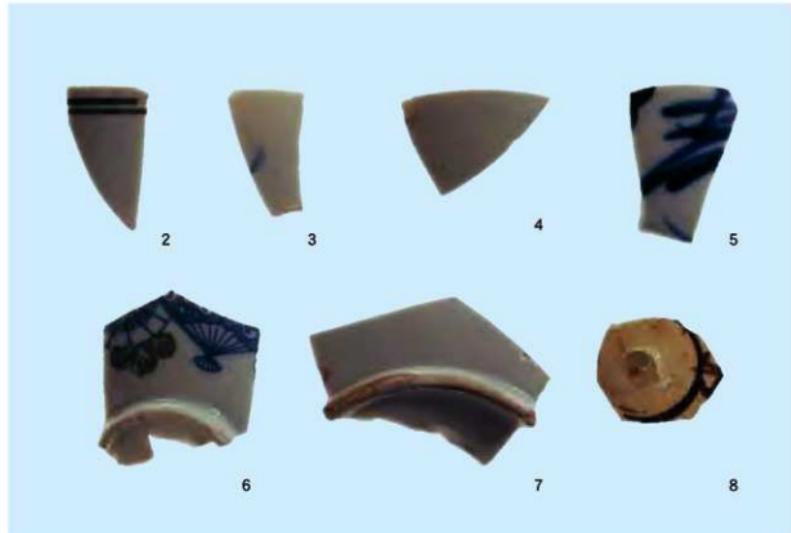


写真21 包含層出土陶磁器

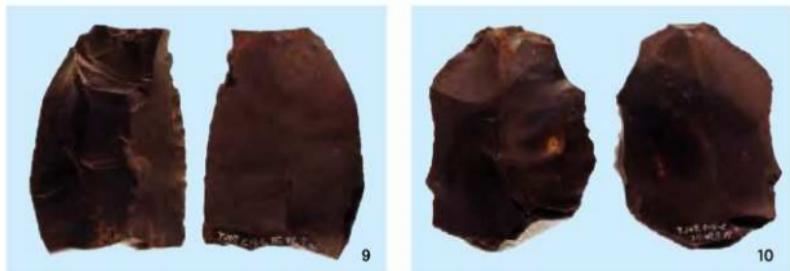


写真22 包含層出土石器

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しせきまつまえししろあと ふくやまじょうあと たてじょうあと たてじょうあと							
書名	史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡 館城跡IV							
副書名	平成19年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	厚沢部町教育委員会発掘調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	石井淳平							
編集機関	厚沢部町教育委員会							
所在地	〒043-1113 北海道檜山郡厚沢部町新町234-1							
発行年月日	2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たてじょうあと 館城跡	北海道檜山 郡厚沢部町 字城丘158 ほか	1363	C-03-14	41° 52'36"	140° 20'46"	20070611 ～ 20070810	397m ²	史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
館城跡	城跡	幕末	堀、柵列	陶磁器、木製品		館城跡南西隅の堀及び柵列の配置を確認した。		

厚沢部町教育委員会発掘調査報告書第6集
史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡 館城跡IV
平成19年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書

平成20(2008)年3月31日
編集・発行 厚沢部町教育委員会
〒043-1113 北海道檜山郡厚沢部町新町234番地の1
TEL (0139) 64-3311
FAX (0139) 64-3822
印 刷 (有)三和印刷
〒040-0061 北海道函館市海岸町8番11号
TEL (0138) 45-0845
FAX (0138) 43-3594